

私、兎の魔王様に転生
しました。～ピンチ
も、バトルも、シリア
スも、ハーレムだって、
最弱チートで乗り越え
ろ！ 目指すは最高に
ハッピーな笑顔の世界
征服！！～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日々の生活に疲れたその貴方に送りたい、頭を空っぽにして読めて、かつ元気と勇気をもたらえるような物語です。笑って嫌なことなんて忘れて、明日を生きる活力になるような最高にハッピーな作品を目指してます！

作品概要

『貴方は、檜渡 瑠娜様。転生者です。種族は兎人族。職業は無職』

月並みな女子高生、瑠娜が目覚めると、そこでは勇者と魔王が世界の運命を賭した最終決戦を繰り広げていた。状況を理解する暇もなく戦いに巻き込まれ、奇跡的に魔王を打ち倒すことに成功するが、次なる魔王に指名されたのは他でもない瑠娜であった！

『ステータスの変更を確認しました。貴方は、檜渡 瑠娜様、改め、ルナ様になりました。職業は『魔王』です』

驚異的な回避能力と幸運値、過剰気味のもふもふ成分だけが取り柄で、攻撃及び防御力は皆無の貧弱な異端魔王が『世界中をスマイルにする』ために、魔界の仲間たちと共に奮闘する異世界ギャグファンタジー。

シリアスもピンチも、笑顔で吹き飛ばせ!!

○評価、及びブックマーク、レビューなんて頂けると喜びの極みです！

この小説は、他サイトにも重複投稿していません。

目次

00	世界が恐怖に飲み込まれました。	1
01	目覚めると、そこは最終決戦でした。	6
02	私、魔王になりました。	25
03	早くも退任の危機です	42
04	権力のグリム 最強ロリババ登場	
05	腕力のゴルダン 筋肉魔人と邂逅	58
	です。	78

00 世界が恐怖に飲み込まれました。

——その日、大陸に生きる全ての人々が恐怖に飲み込まれた。

三日前、聖剣に選ばれし伝説の勇者一行が、始まりの国、ガンジバゼル王国に『魔王討伐』の吉報を届けた。

長い長い、五百年にも及ぶ魔王軍との戦争。その終結を終始劣勢であった人類が、『勝利』の二文字で飾ったのだ。朗報は、瞬く間に世界中に広まり各地で祝宴の準備が進められた。明日を生きられる確証も得られぬまま毎日を過ごし、絶望に蝕まれ心身ともに疲弊しきった人々も、一変して活気づいた。人類が勝ったのだ。これで、平和が訪れる。もう、苦しまなくても良い。皆がそう思っていた。

しかし、勇者一行が浮かべる表情は決して晴々としたものではなかった。追加の知らせを聞いた国王の顔も険しい。

人々が知らされたのは福音のみ。勇者の後述が伝えられることはなかった。いや、伝えることが出来なかった。数え切れないほどの犠牲を払い、人類の持てる術全てを注ぎ込んで強大な魔王を討伐したのだ。

勇者の手元には、もう伝説の聖剣は存在しない。戦える兵士も当時の半数以下であ

る。それも、女子供を含めた人数だ。純粹な兵力を考えたなら、半分以下なんてものではない。

こんな、仕打ちがあつて良いものなのか。魔王は確かに滅した。混沌の元凶はもう存在しない。だが、まさかこんな結末になろうと、誰が予想できただろう。ああ神よ。貴方は、我々を見捨てたというのか。

国王は、両手で頭を抱えた。勇者も、唇を噛みしめてただ黙することしかできない。「親愛なる人類よ。本日は、隣人である諸君等に報告しなければならぬことがある」

その声は大陸中の全ての地域に漏らすところなく届いた。星一つ見えない闇黒の空。強力な伝達魔法により、そこに映し出される光景。誰もが動きを止め、言葉を失い、その映像にくぎ付けとなつた。世界が静寂に包まれた。

そこに映つていたのは夥しい程の異形の化物であつた。蛇の下半身に人間の上半身を持つ妖艶な美女、岩石で形成された体を持つ巨人、何本もの腕を持つ毛むくじやらかな老人、宙を浮遊する蛙のような醜い赤子、巨大な蠅の怪人……

それらの全てがにやにやと不気味に笑みを浮かべながら、空に浮かぶ巨大なスクリーン越しに人々を眺めていた。まるで、自らの獲物を品定めするかのよう。

そんな魑魅魍魎の群衆中においても、一線を画す程の存在感を放つ者たちがいた。人々が見上げる画面のちょうど中心。豪勢な漆黒の玉座に深々と腰を埋め、退屈そうに

頬杖をつく黒い影。シルエットは決して大柄という訳ではなく、むしろ小さい。だが、秘めたる威圧感とは並のものではなかった。その玉座を囲むように三体、人型の魔物が立っていた。それぞれが纏う邪悪な気配が、彼らの地位や身分を表しているようであった。その姿を見て、一般市民だけでなく、国王、勇者でさえも息を呑んだ。彼らはあまりにも危険だ。と、誰もが本能的に理解した。

すると、その内の一体が口を開いた。

「と、その前に自己紹介がまだであつたな。いくら、我々が優等種であつたとしても礼儀を忘れてはそこいらの獣と同じ。無礼を詫びさせてほしい。申し訳なかつた」

そう言つて深々と頭を下げるタキシードに身を包んだ男。人間と見間違ふほどにその身には異形の影は存在しないが、頭部から生えた二本の捻じれた角と、指先から伸びた長く鋭利な爪がまぎれもなく魔人であることを物語つていた。人間でいうと三十歳くらいか、癖の少ない端正な顔立ちをしており、右側の角は途中で折れ先がなかつた。

「私は、四天王の一人。知力のガゼル」

顔をあげたタキシードの魔人がにやりと口の端を吊り上げる。

「同じく、腕力のゴルダン」

続けて、強靱な体軀を誇る魔人が名乗る。

「権力のグリム」

最後に、不機嫌そうにそっぽを向いたまま幼女にしか見えない程に小さな魔人が短く呟く。

そして、ガゼルはばあつと大きく両手を広げた。

「先日の勇者との戦闘により、一時的に四天王の一席が空いてしまつてはいるが気に入らないでくれ。そんなことは、さして重要なことではない。なぜなら」

ガゼルが、自信に満ち足りた表情で玉座に座る存在を見る。

「我らの新たな魔王が即位されたのだから！」

どさっどさつと、人々が手に持っていた物を片っ端から落とした。祝宴会場の設営用工具、アルコールの詰められた木箱、調理用の食材……。その表情には、驚愕、畏怖、失意など、あらゆる負の感情が渦巻いていた。やつとで訪れた平和への兆しは、ただのまやかしだったのだ。がくりと次々に膝をつき、涙を流す。各地で悲痛な嗚咽が漏れ、再び絶望の風が吹き荒れた。

それとは対称的に上空に広がる空間では、「新魔王様万歳！」と、化物たちの咆哮が轟いていた。ガゼルは、魔王の耳元で何かを囁く。魔王がこくりと頷くのを確認すると、すつと手をあげた。同時に静まり返る魔物たち。魔王は、頬杖をつくのをやめて、軽く姿勢を正すと人差し指を天に向けた。その後、おもむろに指先を画面の先の人類へと移して、にやりと笑った。

「我が野望の為に、進軍開始！ 我が名は——」

その夜、新たな魔王が世界を恐怖に陥れた。歴代の魔王とは全く異質な存在であり、対峙した者は皆、口を揃えてこう言った。

「誰も、あの御方を倒すことはできない。どんな猛者であれ、その崇高なる御身に触れることさえ敵わないのだから」と。

01 目覚めると、そこは最終決戦でした。

「うーん。ママあ？もう朝ですかあ？」

至福の安眠を妨げられ、檜渡 瑠娜（ひわたたり るな）はご機嫌斜めという様子で瞼をこすった。ついでに、華の女子高生には似つかわしくない程の巨大な欠伸をかます。

「ふわああ。ねみゆい。今日は休日だよお」

どうやら、意識はまだ半分以上が夢の中にあるようだった。ぴたりと接着された瞼を開眼する素振りも見せずにごろんと反転。気持ち良さそうに寝返りを打つ。だが、いつものふかふかなベッドとは異なる感触に顔をしかめた。巻き込んだつもりでの掛布団の感覚もしない。

「はれ？硬い？」

口の端から涎を垂らしながらぼんやりと薄く目を開いた。ぼやける視界に映る景色は薄暗い。

「なんだあ。まだ夜だよお。ひどいですよママ。私の布団、返してください」

周囲の暗さに安心したのか、寝心地など意に介さず再び眠りにつこうと試みる瑠娜。少し肌寒いのか、ぶるつと震えた後に自らの膝を抱えた。もふりとした感触と共に、温

もりを感じる。

「あ、お布団だあ」

目を閉じたまま、にんまりと幸せそうに笑う。意識がどんどん薄れていき、次第にすーっすーっとして深い吐息が漏れ始めた。体がぶかぶかと浮き上がるような心地の良い感覚に包まれ、吐息が寝息に変わっていく。

（ああ、幸せ。でも、今日って何かあったような・・・）

——が、ふとあることを思い出して飛び起きた。

「今日は、インターハイだー！」

瑠奈は、私立谷峨昌西（やがまさにし）高等学校に通う学生であった。

三年二組、身長百四十八センチ、出席番号十六番。弱小ではあるが女子ソフトボール部の副部长として、三十名程度の部員を頼れるエース兼部長の服部 美琴（はつとり みこと）と手を取り合い纏めていた。美琴はともかくとして、瑠奈自身は決して実力があるという訳ではなく、単に三年生の部員が二人しかいないため副部长の任に就いているのであるが、天性の運動音痴が災いして年中補欠選手だった。公式戦では一度もベンチから立ったことが無いのだ。だからと言って後輩からの信頼が皆無ということはない、持ち前の明るさと面倒見の良さからむしろ慕われていた。トレードマークである兎のゆるキャラ『ルナモッチー』のヘアピンをいつも装着しているため『ピョン吉先輩』、

『うさちゃん先輩』、『ラビ先輩』など、思い思いに愛称で呼ばれ、その愛くるしい容姿も相まって下校時や休日には皆のアイドルとして引つ張りだであった。いわば、谷峨昌西女子ソフト部の歩くマスコットキャラクターである。クールビューティーで最低限度の言葉しか発さず、常にツン成分の鎧に身を包んだ美琴に『ソフト部に瑠娜が居てくれて本当に良かった』とテレさせた逸話は、後輩たちだけでなく部活に関係のない同級生間でも谷峨昌西ローカル伝説の一つとして語られていた。

もちろん、今回のインターハイ地区予選も瑠娜は補欠であった。しかし、高校生活最後の大きな大会。試合に出場するしないは関係なく特別なゲームであることは間違いない。そのため、前夜は気合を入れて夕方十八時に布団に入ったのだ。準備は万端である。

(さあ、かかってこい青春最後の一大イベント。絶対に爪痕を残してやる。補欠だけど) と、瑠娜は自分の顔の前で拳を握りしめて気合を入れた。のだが、

「はれ?」

瞳に飛び込んできた巨大な『何か』を認識して、ゆつくりと拳を下した。半開きのままの口を閉じることも忘れて周囲を一瞥した後、再度確認の意味も込めてじつくりと見回した。

《おはようございます。瑠娜様》

無機質な女性の声が頭に響く。

「えっ？」

脳の処理が追い付かずに、ただ茫然とした。

目の前に広がる光景があまりにも非現実的であったからだ。だだっ広い空間に、どんよりとした濁り気のある空気が蔓延している。何十本もの石造りの太い柱が遥か上空一面に敷かれた漆黒の天井を支え、窓から見える外の景色はひどく荒れていた。唯一の光源である等間隔に設置された燭台の炎は濃緑色で薄気味が悪い。何よりも、離れたところにはわらわらと屯っている生物。明らかに人間ではない見た目をしていた。寝ぼけた瑠娜の頭でも自室では無いことだけはすぐに分かった。寝起きドッキリにしては、あまりに手が込み過ぎている。

全く知らないはずの景色。であるはずなのに、なぜか瑠娜はこの景色に見覚えがあった。いつ見たのだろうと首を傾げる。すると、

「ナに、モのだ？」

地を這うような重低音だった。瑠娜がそれを『声』だと理解するには数秒かかった。さらに、その発信源が眼前の巨大な『何か』であることを認知するのに数秒。

「ええっと、まだ寝ぼけてるのかなあ。あはは」

瑠娜は、誰に向けたわけでもない困ったような笑顔を作り、頭をかいた。

(何この展開？ 夢？ 夢だよね？)

そんな自問に対して回答が返ってくることは当然なかった。

「キサマは、ナにもものだときいているのダああ！」

しびれを切らしたのか、『何か』が大声を張り上げた。どすんつと、とてつもない爆音が響き『何か』の一部が一瞬高く持ち上がり、再び同じ場所に落とされた。地面が抉れ、空気が激しく振動する。土煙がぼうつと立ち込め、床の破片が飛び散ってこつんと瑠娜のおでこに当たり「いたつ」と小さく呻いた。

そこで初めて、目の前に振り下ろされた樹齡云千年を超えるありがたい神木の様な塊が『何か』の足に当たる部分であることに気付いた。

「ひいつ」

あまりの迫力に引きつった悲鳴をあげる瑠娜。それとほぼ同時に、周りからもざわざわと声があがった。

「魔王様。落ち着いてください。魔王城が壊れてしまいます」

「なんなのだ。あの兎人族は？」

「どうやって侵入してきたんだ？」

「気を付けろ。勇者の隠し玉かもしれないぞ」

「魔王様が動揺しておられる。それほどの強敵という訳か・・・」

「あんな弱そうなの、俺でも簡単に殺れるぜえ。ひやははは」

「魔王様。勇者は虫の息です。そのような兎に構うことなく、止めを刺してしまってください」

（魔王？ この人が？）

瑠娜は意図的に上げまいとしていた視線を、恐る恐る上昇させた。

体長二十メートル位はあるだろうか。あまりにも巨大すぎる体に強靱な八本の腕。鋭利な牙を携えた虎を連想させるような顔面。体中に刻まれた傷跡は歴戦の戦士であることを物語っていた。

その魔王が見つめる目線の先、そこには恐怖でペタリと座り込む瑠娜の他に四人の間がいた。その内の三人は倒れて気を失っており、彼らを庇うような形で立派な白銀の鎧を装備した青年が剣を構えている。青年は満身創痍のようで今にも膝をついてしまいうさそうであった。立っているのもかなり苦しいのだろう。足はがくがくと震え、魔王に向ける剣先はふらふらと定まっていけない。

だが、その表情だけはまだ死んでいないようであった。瞳の奥には、熱い信念が宿り魔王をきつとまっすぐ睨みつけている。命を賭してでも守るべき使命がある。守るべき仲間がいる。守るべき世界がある。

口に出さずとも、そう語っているようであった。

（この人が勇者？　で、周りを囲む化物みたいな人たちは魔王の手下？）

このサイズの魔王がいても狭さを微塵も感じないほどの広大な空間を挙動不審に見渡してから、徐々に状況を理解していく瑠娜。ぼうつとしていた思考が急激に鮮明化されていく。そして、見覚えのある景色の正体を思い出した。

（ここ、魔王城だよ！　ドクエで見たのと同じだ！　しかもこの状況、間違いなく最終決戦……ラスボスのシーンだよね？　勇者と魔王による世界の命運を賭けたタイプ。だって、勇者さんの持つてる剣、なんか光ってるし。というか、勇者さん劣勢ですよね。ここから逆転できるんですか？　負けちゃうよ。誰か、ベ○マかけてあげて！　このままじゃ、世界が滅ぼされちゃうよ）

そして、何より、

「私、絶対に場違いですよね」

瑠娜は自分が巻き込まれた局面を的確に把握すると共に、この場で最も不必要で自然な存在が他ならぬ自分であることを悟った。

「君は、一体何者なんだ？」

勇者は魔王から視線を外さずに尋ねた。肩で息をするその姿から、かなり消耗してい

ることが分かる。

「ううう。そんなの、私の方が聞きたいですよ」

瑠娜は涙目になりながら頭を抱えた。

自分が何の為にここにいるのか。どうやって実家のベッドから移動したのか。そもそもここは日本なのか。インターハイはどうなったのか。疑問は腐るほどあった。

「どうして、こんなことになったのでしょうか？」

何か心当たりがないかと記憶を遡るが、何度試みても（そういえば、昨日の晩御飯は大好物のエビフライだったな・・・）等の全く関係の無いものしか引き出すことが出来なかった。

すると、先ほどと同じ機械のように単調な女性の声が聞こえてきた。

《貴方は、檜渡 瑠娜様。転生者です。職業は無職。ステータスレベルは壺。種族は兎人族。装備品は『純白の胸部さらし』のみです。保有スキルは、ノーマルスキルが『回避性能強化壺 レベル壺』、『聴覚向上 レベル壺』、『跳躍距離補正 レベル壺』、『危機探知能力向上 レベル壺』、『運氣上昇 レベル壺』、『穴掘り名人 レベル壺』、『発情期 レベル壺』、『寂しがり屋 レベル壺』、『抜け毛 レベル壺』、『エクストラスキルは未習得、ユニークスキルが『草食動物の生存本能』になります》

瑠娜は突如聞こえてきた声に驚き、ぎよつと身を強張らせた。

「転生、者？」

恐る恐るといった様子でそろりと頭上を見上げるが、もちろん、そこに声の主はいなかった。

《はい、転生者です。瑠娜様がおられた世界とこの世界は全くの別物。瑠娜様にとってこちらの世界は異世界という事になります》

「でも、私まだ死んでないはずですよ。こういうのって普通、交通事故で死んだり、殺人犯に殺されたりしてから起こるものなんじゃ・・・」

瑠娜は、決してアニメやラノベなどのサブカルチャーに詳しい人間ではなかった。それでも、一般常識程度の『転生モノ』というジャンルに対する知識は持ち合わせているようであった。

「お、おい。急にどうしたんだ？ 大丈夫か？」

魔王の一喝時とは異なるざわつきが起こり始めていた。どうやら、例の女性の声は瑠娜以外には届いていないようである。勇者もその周囲の化物たちも、緊張した面持ちで瑠娜の様子を伺っていた。

まあ、突然出現した謎の少女が天に向かって独り言を紡ぎ始めたのだ。誰だつて不気味に感じるのだろうか。

《はい。正規ルートはそうなります》

「正規ルートって、私は違うってことですか？ それに、貴方は誰なんですか？」

《私は、ナビゲーターです。この世界において、必要最低限の支援をさせて頂きます…それと、貴方がここに召喚された理由なのですが…》

「…」

固唾を飲んでナビゲーターの言葉を待機する。正規ルートではない転生者。もしかして私は特別な存在で『とある偉業』を成し遂げるためにこの世界に呼びだされたのではないのか。そんな期待に心なしかうずうずとした。だが、その答えは非常に非情なものだった。

《転生対象者を誤りました》

「へ？」

気付かないうちに胸に当てていた右手をさつと下す。今なんて？

《本当は貴方ではなく、老人夫婦の身代わりとなり暴走したダンプカーに撥ねられて亡くなった心優しい青年を最強の龍人族として転生させる予定だったのですが、区画整理により転生予定地と事故現場の座標がいつの間にかずれておりまして、それに気づかず誤って当初の予定地で眠る貴方を転生させてしまったのです。最悪そこまでは良いとしても、まさか貴方が龍人族どころか純粹な人族に転生する素質さえ持つておられないとは…何とか、兎人族の体を形成することには成功しましたが、そちらに力を注

ぎすぎしてしまい、転生地点も始まりの街ではなく魔王城となつてしまいました》

「何ですかそれは！ 完全に単なる被害者じゃないですか！ 今すぐ帰してください！

ママの待つ暖かい我が家へすぐに！」

半狂乱で頭部を振り回す瑠娜。さながら、某ロックバンド『マキシ○مامザホ○ルモン』を彷彿とさせるヘドバンのようであつた。

《それは不可能です。あちらの世界での貴方の存在は既に別の瑠娜様として置換されました。後戻りをする、一つの世界に二人の瑠娜様が存在することとなり、歪みに繋がります。歪みは徐々に肥大化していき、いずれ世界の崩壊をもたらしめます》

それを聞いて、「うううううううう」と、さらに激しく乱れる。

「うわあ。何か始まつたぞ。離れる。危険だ」と、魔王の手下たちは揃つて数歩後ろに退いた。さすがの勇者も「くっ」と、一歩後退する。

皆が恐れおののいているのも気にせず、瑠娜は、一通り喚き散らしたところで突然ぴたりと動きを止めて、ぽつりと呟いた。

「して、その轢かれた方はどうなつたのですか？」

《転生は叶いませんでしたが、そのまま天国へと召されました。現在は悠々自適な死後ライフを送つておられることでしょう》

「それは、せめてもの救いですね。はは」

がつくりと項垂れて乾いた笑い声を発する。瑠娜は、不思議とこの理不尽な仕打ちを受け入れてしまっている自分に愕然とした。前世に不満があった訳でもない。むしろ、かなり充実した日々を送っていた。毎日が楽しかった。

『スマイルでいきましよう』

それは、瑠娜が幼いころから意識的に口癖としてきた言葉だ。この魔法の言葉は、試合に負けて険悪な雰囲気になる仲間を、失恋して落ち込む友人を、パパを亡くし悲しみに暮れるママを、何よりも自分を、何度も何度も絶望の淵から救済してくれたのだ。今回もきつと助けてくれるはずだ。何とかなるはずだ。希望が見つかるはずだ。

「スマイルでいきましよう！」

瑠娜は、目尻に溜まった涙を拭うと、ぐつと小さく拳を握った。『覚悟を決めた』。そんな表情に変わっていた。

（天国のパパ。現世のママ。私は、異世界にて楽しく笑顔で生きていきます）

「スマイ？ な、なんか唱えたぞ。魔法か？ 警戒しろお」

そんなどよめきの中、魔王は再び声を張り上げた。

「よくワカラヌが、キシヨクのワるいウさギだ。ガゼる！ こいつをヤツぎき二しろ！」

魔王に指名されたのは、二本の捻じれた角を持つ魔人であった。ガゼルと呼ばれた魔人は、「承知しました」と、短く返答して前に出る。しなやかでスマートな歩き方、洗練

された所作、びしつと決まったタキシード、その姿には気品が溢れていた。

「おい、四天王のガゼルが出たぜ。あの兎野郎がどんな豪傑かは知らねえが、終わったな。四天王は魔王軍の精鋭部隊だ。その辺の輩が敵う相手じゃねえ」

げへへへと、手下たちの汚い笑い声が魔王の間にこだました。

死角から近づいてくるガゼルの足音をしっかりと耳で捉えながら、瑠娜は全く別のことを思考していた。自分の体のことだ。

なぜ、今の今まで違和感を抱かなかったのか不思議に思った。何度も視界の隅に映っていたはずなのに、何の疑問も感じなかった。まるで、それが普通のことであると脳が認識していたかのように。意識して見れば見るほど、記憶にある自分の体とは異なる構造をしていた。まず第一にこのフカフカの白い体毛。肘から先と、腰から下すべてが厚い純白で覆われていた。よく観察すると、長い毛と短い毛の二重構造となっている。暖かく、なによりモフモフであった。逆に、体の中心部分から肘の手前までは記憶にあるものと同じ人間のそれであった。ツルツルで体毛の一つも見えない。瑠娜は確認のため、毛で覆われた手で自らの顔部を触った。

「顔は、人間のままだ。あ、耳が随分と上の方に・・・長いですね。さすがは兎さん」
続けて、手の平を臀部に移動させる。

「うわあ。毛が柔らかい。気持ちいい。モフモフだあ・・・あ、尻尾もありますね。丸

い……」

触診の要領で自らの体の変化を確かめたあと、ふとナビゲーターの言葉が頭をよぎった。

『装備品は純白の胸部さらしのみです』

ちらつと自らの胸部に視線を移す。転生前から変化が見られない自己主張の少なめな相棒が包帯のようなもので巻かれていた。それ以外は、何も着ていない。おへそ丸出しの脇丸出し。そして当然のように、下半身にも装着している布なぞ存在していなかった。分厚い体毛に覆われているため、幾分か羞恥心は軽減されているように感じるのだが、一度その事実に辿り着いてしまうと急に恥じらいが込み上げてきた。

これではただの痴女ではないかと、かつての世界の基準で考えてしまう。今更感はないが、瑠娜は咄嗟に右腕で慎ましやかな胸部を、左腕でフワフワの毛で埋もれた恥部を抑えるようにして隠した。

「ううう。私は何て格好をしているのでしょうか。恥ずかしいですう」

林檎のように赤面して、背を丸める。その時、ぴくりと耳が空気の擦れる音に反応した。

「っ！」

ほとんど反射的な跳躍であった。すぐ背中側にはガゼルと呼ばれた二本角の魔人の

後頭部が見える。どうやら、背面跳びの格好でガゼルの初撃をひらりと躲したようであった。ガゼルは驚いたように目を見開いていた。瑠娜が鎮座していたはずの地面に深々と埋まった爪を引き抜くと、自分の背後に着地した瑠娜の方をゆらりと振り返る。

「お前……」

ガゼルは、ぎろりと瑠娜を睨みつけた。その眼光は獲物を狙う狩人のものであった。久々の好敵手との邂逅の予感に、にいつと口の端を吊り上げるガゼル。瑠娜は、ぶるつと体を震わせる。そして、思わず叫んだ。

「こ、このケダモノさん！ 私にナニをするつもりですかあー！」

胸と下半身を必死に隠し、顔を朱色に染めながらもじもじと身を振るその姿はかなり背徳的な感情を湧き上がらせた。通常は、『獣』を意図するその単語に明らかに別の意味が込められていることをガゼルは察した。

「ケ、ケダモノだと！ それに、ナ、ナニとは何だ！」

ガゼルは、明らかに動揺しているようであった。

「な！ それを私の口から言えと？ どれだけ、私を辱しめるつもりなんですか！」

さらに顔を赤くする瑠娜。

「お、俺はそんなつもりは……」

「ひい。近づかないでください。ケダモノ……変態さん！」

「おい！ なぜわざわざより直接的な表現に言い直したんだ！」

「いやああ。犯さっ」

「やめろおお！」

瑠娜の言葉を途中で遮るガゼル。すでに、登場時の冷静なイメージは微塵も纏っていなかった。

「生まれ！ その娘に乱暴するな！ このケダモノめ！」

ガゼルのすぐ近くで勇者が叫ぶ。

「何だと！ 貴様まで・・・俺は別にそういうつもりは！」

「おいおいガゼルって、ロリコンだったのかよ」

「婦女暴行って酷すぎるだろう。悪魔かあいつ」

「四天王っていう位だから、どんな崇高なる魔人かと思っただけど、ただの変態か」

「目を合わせるな。ロリコンがうつる」

勇者に続くように、周囲の化物たちからも罵詈雑言が囁かれ始めた。

「おい。待てよ。何でそうなるんだよ」

ガゼルは、助けを求めるようにオロオロと周りを見渡すが、誰も顔を伏せて目を合わせようとはしなかった。

「何でだよおお」

ガゼルは頭を抱えて叫んでから、がつくしと膝をつく。そして、すぐさま気持ちを切り替えると「殺してやる！」と瑠娜へと襲い掛かった。

「変態が兎の少女を襲うぞ」などとという身内からの心ない言葉はことごとく無視をして、長く鋭い爪を縦横無尽に振り回し魔王の命令だけを実行に移す。

だが、瑠娜は「ひいいい」と悲鳴をあげながらも、全ての攻撃をすんでのところで躲していた。兎人族特有の回避能力の高さと、瑠娜の持つスキルとの相乗効果により常軌を逸した動きを見せる。大切な部分を隠す腕の位置はそのまま、ひらりひらりと舞うように危なげなく猛攻を避ける様子には、まだ余裕さえ感じられた。

まるで、実態の無い煙でも切り裂くような感覚に早くもガゼルは息を荒げていた。怒りの感情に半ば我を失っていたこともあつてのことだろうが、明らかに疲労の色が濃く、次第に動きが鈍くなつていく。それとは反対に、瑠娜の息は全く乱れていなかった。

「なぜ、当たらないんだ？」

「なんで、私避けれてるんですか？」

そんな二人のやり取りについて我慢の限界が訪れたのか、魔王が動いた。

「シツぽうシタゾー！ ガゼる！ キさまも、そのウサギとトモにココでくたバレー！」

魔王の激昂と共に、ぶわっという強い突風が巻き起こった。

「きゃー！」

何事かと魔王の方を見る瑠娜。

「はれ？」

しかし魔王の姿は見えなかった。視認できたのは巨大な拳。視界の全てを埋め尽くすほどの圧倒的な暴力。

——死んだ。

という究極的な結論にいつも簡単に達してしまう程の圧力がそこにはあった。コンマ数秒後には瑠娜の華奢な肢体に到達する。兎人族の体は回避能力に特化している分、ずばぬけて脆いのだ。当たれば、間違いなく即死だろう。

今の瑠娜にはこの攻撃を避ける術はなかった。魔王の拳があまりにも大きく、速過ぎるため、今から回避行動をとった所で完全に手遅れだ。死んでしまう。この世界のことをろくに知ることもなく。

(ママにもまだお別れを言っていないのに！)

微塵も予期していなかった『死』という結末。瑠娜は『異世界転生』と聞いて、どこか楽観的な感情を抱いていたことに気付いた。ここに来て、『死』なんていうものはどの世界でも平等なのだと理解した。そして、恐怖が瑠娜の思考を埋め尽くした。

(嫌だ！ まだ死にたくない！)

と、心から懇願した。

(怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！)

それ以外の感情が瞬時にしてすべて消え去り、瞳から涙が溢れる。絶望が体を支配する。底知れぬ暗黒に精神が浸食され切った瞬間。希望の光が差し込んだ。

ピロピロピーン、というこの状況に似つかわしくない音とともに時間が止まり、瑠娜の脳内にアナウンスが流れた。

《極限値の恐怖を観測しました》

02 私、魔王になりました。

世界が静止していた。

魔王の一撃による風圧で巻きあがった床等の破片は空中で動きを止めていた。巻き込まれまいと飛び上がったガゼルも、瑠娜を庇おうとするも敵わず空しく手を伸ばす勇者も、外野で騒ぎ立てる化物たちも、もちろん振り下ろした拳により今にも邪魔な兎を押し潰さんとしている魔王でさえも、時間という概念が一時的に取っ払われすべてが静止していた。

その中で、瑠娜だけがこの瞬間を観測できていた。しっかりとした意識を保ったまま認識していた。かといって、自由に動けるといふ訳ではない。瑠娜の体もまた、時間を失っていたのだ。『死』がすぐ目前まで迫っているというのに、避けることはおろか視線をずらすことも、瞼を閉じることもできない。

《極限値の恐怖を観測しました。ユニークスキル『草食動物の生存本能』の発動条件を満たしています。いかがしますか？》

淡々とした口調でナビゲーションが始まる。

——沈黙。

《失礼しました。時を刻まないこの空間では瑠娜様であつても回答するのは困難でしたね。うっかりしておりました。おそらく瑠娜様が疑問に思われているであろうことを、簡潔に説明させていただきます。もしスキルを発動した場合、現状を打開できるかも知れません。保証はできませんが。もちろん代償はあります。代償は、今後攻撃系のスキル及び魔法の一切を習得することが不可能になります。》

『可能性がある』瑠娜にはその言葉が引つ掛かった。

絶対に助かる訳ではないという事が推測できたからだ。しかも、発動には代償が付くとのことだ。この世界のことを詳しくは知らない瑠娜にとつて、それが今後の異世界生活においてどれほど支障をきたすのかは想像もつかなかつた。慎重に選択しなければ、後で後悔することになるかもしれない。この一時的な休息がいつまで続くか分からないため、瑠娜は必死で思慮をめぐらした。

だが、ナビゲーターが放つた次の言葉により、即決することとなつた。

《もしスキルを発動しなかつた場合は、死にます》

(じゃあ、前者しか選びようがないじゃないですか！)

と心の中で激しくツツコミを入れる。

《発動には瑠娜様の許可が必要です。合図をしたら、時が刻み始めますので、手遅れになる前に回答をお願いします・・・はい》

そして、止まった際と同様に突然世界は動き始めた。

「許可許可許可許可許可あー……！」

口が動かせるようになるや否や、瑠娜は腹の底から叫んだ。時間を取り戻した魔王の拳が瑠娜の鼻先に到達する。

「ひん、ひん」

その一瞬の間に、とんでもない量の情報が瑠娜の頭を駆け巡った。

《スキルマスターの承認を確認しました。ユニークスキル『草食動物の生存本能』を発動。今後の攻撃系スキル及び魔法の習得を制限します。また、習得済みの攻撃系スキル及び魔法をすべて破棄します……完了しました。スキルの効果により恐怖を数値化。計算中……完了しました。恐怖値を全てスキルポイントに振り替えます……完了しました。スキルポイントの累計が五億七千六百六十一万三千八百二十四になりました。これらを現在の保有スキルの内、優先度が高いと考えられる順に振り分けます。『回避性能壺 レベル壺』が『回避性能壺 レベル拾』に変化しました。レベル上限に達したので『回避性能壺 レベル壺』に進化します。『回避性能壺 レベル壺』が『回避性能壺 レベル拾』に変化しました。レベル上限に……』

おびただしい程の文字列が次々と叩き込まれていく。

《……『激運 レベル拾』に変化しました。なお、『穴掘り名人 レベル壺』、『発

情期 レベル壺』、『寂しがり屋 レベル壺』、『抜け毛 レベル壺』については緊急性が低いためスキルポイントの振り分けは行いません。現在、スキルポイントの累計は五億七千二百十三万四百五十一です。残りのスキルポイントを全て使用し、ユニークスキルを作成します。作成中・・・完了しました。おめでとうございます。ユニークスキル『脱兎』を習得しました。それに伴い『回避性能強化参』、『異常聴覚』、『跳躍距離補正』、『危機探知能力向上』の全てを破棄します。さらに、残りのスキルポイントでユニークスキルを作成します。作成中・・・完了しました。申し訳ありません。予定していたユニークスキル『超激運』の作成に失敗しました。代わりにユニークスキル『死神王の太鼓判』を習得しました。それに伴い『激運』を破棄します。現在のスキルポイントの累計は八です。以上でユニークスキル『草食動物の生存本能』の発動を解除します。最後に、ユニークスキル『草食動物の生存本能』を破棄します》

どこおん。

ナビゲーターのアナウンスの終了と同時に魔王の拳が振り下ろされた。

「なぜだ。なぜなんだあ！」

「ひいひい！ 誰か助けて下さ〜い！」

「うおお。どうなっているんだ。魔王様の攻撃が全て見切られているだ」と

「初めて見た時から、ただの兎じゃあないと思っていたんだ」

「あいつ、魔王様を手玉に取ってやがる。おっかねえ」

魔王の八本の腕に追われ、瑠娜は小一時間大量の涙を流しながら逃げ回っていた。

ユニークスキル『脱兎』は、回避時のみという限定的な場面において極限值までその性能を向上させるといふ特殊な効果を持っていた。その驚異的な瞬発回避力によりあの危機的状况からするりと魔王の一撃を避けることに成功したのだが、それが魔王の逆鱗に触れてしまったようであった。

プライドを傷つけられた魔王は何とんでも瑠娜を叩き潰そうと執拗に猛攻を加えていた。しかし、『脱兎』の効果はすさまじく、八本全ての腕を持つとしても一向に当たる気配すらしない。どんな体勢からでも、たとえ空中であったとしても、見事なまでにあらゆる攻撃を避けてしまうのだ。

その光景を見た魔王の手下たちは口々に瑠娜を讃えるのだが、それが更に魔王の自尊心を抉った。

当の瑠娜はと言うと、

「ひぎやああ。かすった！ 今かすりましたよね！ ひい！ 助けて！」

と、ご覧の有様であった。余裕のよの字もないようではあるが、そんな本人の心境な

ど露知らず、周りはひたすらに感心するばかりだ。

「もう、ヤメだ。はあ。ハあ。ゼンぶ、ケチラス。はア」

いつぞやのガゼルの様に、息を荒げ大粒の汗を流す魔王。ちなみに、ガゼルはというと魔王の拳の直撃を受け勇者のはるか後方で伸びてしまっていた。原型を留めているところは、さすが魔人というべきか。かなり丈夫な体を持っているようだ。

「はアああアアア」と、魔王が力を溜め始める。周囲の空気が振動し強力な闇の魔力が魔王の元へと集約していった。

「やばいぞ。魔王様の究極魔法だ！」

「城が壊れちまうよ」

「巻き込まれたら死ぬぞお」

魔王の手下たちが揃って慌てだす。中には、両手を組んで天を仰ぎながら神頼みするものまでいた。その様子から魔王が唱えようとしている魔法がどれほど強力なものなのか伺えた。勇者もごくりと生唾を飲み込む。

魔王は、八本の腕を自らの胸の前に移動させ手の付け根を合わせるような形で開く。その中心部にみるみるうちに巨大な闇の塊が形成されていった。その塊はどんどん大きさを増していく。しかも、その軌道上には瑠娜だけでなく勇者とその仲間、おまけにガゼルも含まれているようであった。最悪、瑠娜だけなら避けることができるのだろうか

が、満身創痍の彼らには難しいだろう。

「えっと、一体どうすれば・・・」

「兎のお方。恥を忍んでお願いがございます」

あたふたとする瑠娜の背後から、勇者が声をかけた。

「ほえ、は、はい。何でしょうか？」

「私には、もう魔王を倒すだけの力が残っておりません。拝見させていただいたところ、貴方のそのスピードは魔王をも凌ぐ。私の代わりに、この伝説の聖剣で魔王を倒しては頂けませんか？」

「わ、私がですか!! そんな大役。私なんかでは到底・・・」

「いいえ。貴方しかいないのです。この状況下において、混沌の世界を救えるのは、貴方だけなのです」

「うっ」

勇者の熱い眼差しを受けてたじろぐ。元々、人の頼みを断れない性格の瑠娜は少し迷ったようではあったがすぐに一大決心をした。

「はい。できるかどうかは分かりませんが、やってみます!」

ガッツポーズをする瑠娜。

「おお。なんとも頼もしい。時間がありません。まずはこの剣をお持ちください。聖剣

に選ばれし者の名で命ずる。一時的に聖劍の所有者を彼の者に委任する」

そう唱えて、薄く光る劍の柄を瑠娜に差し出した。瑠娜は、「わ、分かりました」と勇者から劍を受け取る。勇者と瑠娜は視線を合わせてから無言で頷きあつた。

——後は任せました。

勇者の表情には瑠娜への信頼と期待が込められていた。瑠娜が劍をしつかりと握つたことを確認してから、勇者はそつと手を離れた。が、

がつんつ

「えっ？」

「お、重すぎますう」

勢いよく劍の切っ先を地面に落下させる瑠娜。それでも柄を離さなかつたのはせめてもの根性なのか。勇者は一瞬間くらつたようであつたが、すかさず瑠娜のフォローに回つた。劍を跨ぐようにして瑠娜のふるふるすると震える手を握る。

「すみません。レディにこのような重いものを持たせてしまつて。振つた際の威力は落ちてしまいますが、致し方ありませんね。聖劍に選ばれし者の名で命ずる。彼の者が自由に扱える程度の質量となれ」

「あつ」

ふわつと腕にかかる重さが軽減されたのを感じた。勇者は優しく微笑み、ぼんぼんと

瑠娜の手を叩く。

「これで、大丈夫です」

瑠娜もにこりと笑顔を返す。

「本当ですね。これなら、私でもっ」

瑠娜は、軽くなった聖剣を持ち上げた。勇者がそれを跨いでいることも忘れて・・・
「ござんつという鈍い音と共に、勇者の『子供勇者』に思いつき聖剣が突き立てられた。」

「あ・・・」

やってしまったと瑠娜の顔が青ざめる。しかし、もつと青ざめているのは勇者の方であつた。

数秒の空白の後、「いつでええええええ」と、甘いマスクをぐちゃぐちゃにしながら悶絶する。ぴよんぴよんとその場で飛び跳ね、痛みを和らげようと必死であつた。

「おお、あの兎。勇者に攻撃しやがった。一体どちらの味方なんだ。狂ってやがるぜ」
瑠娜の不注意は、周囲に混乱を波及させた。

「くううう。いつつううう。あれ？」

脂汗をにじませ股間を抑えて跳ね回っていた勇者だが、体力的な限界もあつたのだらう。着地のタイミングで両足を同時にぐねってしまった。そして、踏ん張ることもでき

ずにそのままの体勢で後頭部から転倒する。

ごちんつという衝突音。

勇者がこけた先にたまたま、気を失う仲間が腰に差している短剣の柄があつたのだ。勇者は「うっ」と短いうめき声をあげて動かなくなった。

「勇者を、倒しやがった、だと・・・」

魔王の手下の内の一体が驚嘆の声をあげた。

しかし、この偶然の連鎖は終わらなかつた。勇者の後頭部が仲間の短剣の柄に激突した際の衝撃がきつかけで、その短剣に込められた風魔法が発動する。ぽんつという破裂音が響き短剣の先端で空気が弾けた。それによりその仲間が腰から下げていた道具袋から丸い球体が真上に飛び出す。

同時に、力を溜め終わった魔王が「これで、おわりだ」と叫んだ。直径五メートル近くにまで膨れ上がった闇が波打つ。

「ファイナルデスビーム」

魔王が詠唱するのとほぼ同時に、道具袋から飛び出した球体が弾け、眩い光を放った。

「な、閃光玉だとー」

強烈な光に視界を奪われ究極魔法の標準がずれる。闇の塊から放出された超破壊光線は当初の軌道を外れ瑠娜の耳のすぐ上部を通過した。

「あ、聖剣が！」

その際に、瑠娜が持ち上げていた剣の先端をかすめ、あまりの衝撃にそれを手放してしまう。カーン、カーン、カーンと、聖剣が部屋中の壁やら柱やらにぶつかりながら飛んでいく音が聞こえたが、視界を焼き尽くす閃光を前に誰もその行方を追うことはできなかった。

そして、

「ギャああああアアアああああアアアあ!!」

けたたましい声量で、魔王の悲鳴がこだました。

「嘘だろ。魔王様。そんなばかな・・・」

「一体、何が起きたんだ？」

瑠娜が眩しきから解放された時、そこには気を失う伝説の勇者一行と左胸に聖剣が突き刺さり絶命している魔王の姿があった。

瑠娜が手放してしまった聖剣は究極魔法の衝撃で加速し壁や柱に跳ね返され、最終的には魔王の心臓に辿り着いたらしい。魔王の手下は皆、ぽかんと口を開けて唾然としており誰一人として現実を受け止めきれずにいた。あの、最強災厄の魔王が殺られた。あ

り得ないことであつた。

「過去数百万年にも及ぶ魔族の歴史の中でも歴代魔王中一番強いと言われていたあの
方が……」

「俺たちは一体どうすれば」

途方に暮れる化物たち。

「私も一体どうすればいいのでしょうか……」

と、同様に瑠娜も呆然と立ち尽くしていた。

魔王と勇者を交互に見つめ、はあつとため息をつく。通常の物語であれば、勇者の活躍で魔王が倒され世界は平和になりました。めでたしめでたしという幕引きになるの
だろうが、当の勇者は白目を剥いて気絶している。瑠娜はとりあえず、勇者を起こそう
とつんつんとおでこを突いてみた。

「あおう、終わったみたいなんですが。大丈夫ですかあ？」

だが、勇者が目を覚ます様子はなかった。すると、

「ドロップ ウォーターマス」

突如として、勇者たちに向かって大量の水塊がどぼどぼと降り注いだ。

「ひゃあ！ つべたい！」

瑠娜は、咄嗟に飛び跳ねて直撃を回避するが、跳ね返った水滴に悲鳴をあげた。一同

は、揃って詠唱主の方に顔を向ける。そこには、眉間に皺を寄せた捻じれ角の魔人、ガゼルが腕を組んで立っていた。魔王に殴打された際の衝撃によるものだろうか、右側の角の先端が折れてしまっている。

「うう」

「あれ？生きてる？」

「私は、魔王にやられたはずでは？」

「んあ？」

びしょびしょに濡れた勇者一行が、ガゼルの水魔法により覚醒する。四人で支え合つて何とか立ち上がり、目の前の光景を見て驚愕した。

「魔王が死んでいる」

「信じられん」

「勝ったのか？」

「兎のお方。貴方が成し遂げてくださったのですね」

勇者は、仲間にも肩を支えられた状態で瑠娜に右腕を伸ばした。広げた手の平は、間違はなく握手を求めるものだった。

「本当にありがとうございました。貴方は英雄です。貴方のおかげで、この長く苦しい魔族との戦争を終わらせることが出来ました。是非、その功績を我らの王に伝えさせて

ください」

そう言つて、にこりと笑う。その顔には、戦いを終えた戦士の安堵が浮かんでいた。「え？ あ、は、はい」

瑠娜は、全部ただの偶然なんだけど、内心思いながらも、せつかくの雰囲気をつち壊すのも癪だと思いきこちない笑顔で返した。

そこで、瑠娜はようやく気付く。自分がこの異世界に転生した理由を。そうか、私は英雄になるためにこの世界に召喚されたのか。魔王を倒した者として、皆からちやほやされながら、王宮で贅沢な暮らしを満喫する運命だったのだ。そうか、それで合点がいった。

——と。

瑠奈は、差し出された勇者の手を握り返そうと右腕をあげた。しかし、運命はそんなに優しいものではなかった。

「何が終わるって？」

瑠娜の右腕が輝かしい未来の種に辿り着く前に、ガゼルの両手にしっかりと包み込まれてしまった。

「はれ？」

「勘違いしないでもらいたい。何も終わってなどいない。むしろここから始まるのだ」

ガゼルは、蔑むように勇者の顔を横目で見下ろす。

「何が、始まるというのだ！ 魔王は死んだ。これ以上争う必要はっ」

「貴様は阿保なのか。魔界規定第九千二百六条第四項『魔王と闘いこれに勝利した者は、新たな魔王となる。ただし、勇者を除く』。つまりは、貴様らの目の前におわすこの御方こそが、新たな魔王様である。始まるのだよ。前魔王を遥かに凌ぐ力を持った新魔王による侵略がな！」

「なっ!!」

勇者と瑠娜が同時に目を見開いた。

そして、ガゼルは瑠娜の目前で跪き、頭を下げた。

「おお。偉大なる新魔王よ。上級魔人ガゼル。貴方に忠誠を誓います」

その姿を見て次々と膝まずく化物たち。

「おお、崇高なる主よ。我らも忠誠を誓います」

口々に勝手な誓約が立てられていく。その姿をあんぐりと口を開けて眺める瑠娜。

ガゼルは、にやりと口の端を吊り上げると顔をあげた。

「貴方の名をお聞かせください」

瑠娜は混乱しながらも、とりあえず返答した。

「る、瑠娜でしゅ」

盛大に嘯み散らかすが、ガゼルは気にしない。ぼつと立ち上がると、右手だけ離してそのまま身を翻す。

そして、高らかに叫んだ。

「魔王様の命令だ！ 勇者どもを摘み出せ！ しかし、絶対に傷つけるなよ。必ず生きたまま王国へ送還するのだ！ 我らの新たな主人の誕生を知らしめる生き証人として、一役買ってもらおうではないか！」

「はい！ 承知しましたあ！」

ガゼルの号令により、数体のバキバキに切れた筋肉を持つ黒光りするマツチヨの魔物が現れ勇者たちを持ち上げた。そしてそのまま部屋の入口へと運んでいく。瑠娜は、「あ、私の未来が……」と、涙目になりながらその姿を目で追うが、もうどうすることもできなかった。

——さらば、私の希望。さらば、私の夢。さらば、私の英雄伝説。

「わっしょいわっしょい」と、暴れる勇者たちをお祭り気分ですべて部屋から排除する化物。その姿が完全に見えなくなったところで、瑠娜は潔く諦めた。

ガゼルは、左手で握ったままの瑠娜の腕を高々と持ちあげて叫んだ。

「魔王ルナ様の誕生だあ！ 万歳！」

「万歳!!」

「万歳!!」

「万歳!!」

最大級の熱気に包まれる魔王城。興奮は最高潮であった。ただ一人、がつくしと肩を落とす瑠娜を除いて。

(天国のパパ。現世のママ。私、高校を卒業する前に就職が決まりました。勤務地は異世界です。役職は、『魔王』だそうです)

ピロピロピーン

《ステータスの変更を確認しました。貴方は、檜渡 瑠娜様、改め、ルナ様になりました。職業は『魔王』です》

感情が微塵も感じられない冷徹な口調で、恒例となりつつあるアナウンスが流れた。

03 早くも退任の危機です

魔界の最深部。死霊の丘を越え、鮮血の沼を進み、瘴気の谷を抜けた先に存在する、巨大な魔王城。

魔王の間での騒動から一夜明け、ルナはガゼルに案内された豪華な寝室内に設置されたベッドで横になっていた。ガゼル曰く、今後はこの部屋を自室にしても構わないとのことであったが……いささか、広すぎるようであった。バスケットボールのコートが軽く収まる程度のサイズと言えば、分かりやすいかもしれない。

「うーん。昨日は疲れていたのでぐっすりでしたけど、やっぱり少し、落ち着かないですね」

「ごろごろと寝返りをうちながら、欠伸を噛み殺す。ルナが目覚めてから既に二時間が経過していた。」

窓の外はまだ暗い。起床したばかりの頃はびくびくと怯えながら部屋を散策していたのだが、畏らしきものは一切見当たらず、その内に警戒心も解けて、備付けのシャワールームでリフレッシュした後に、こうしてのんびりとくつろいでいた。

いくら何でも、見知らぬ土地で不用心が過ぎるのではないかという程のだらけ具合で

ある。彼女の適応力、いや、神経の凶太さか、ただ単に能天気なだけか。その点に限っては、敵う者はいないだろう。そう、前魔王でさえも。

「私が、魔王ですかあ……」

仰向けの体勢で天井を見上げ、右手を顔の前に持ち上げる。そして、「ナビゲーターさん、ステータス表示をお願いします」と、一言。

《はい。ルナ様。一応言っておきますが、何度見ても内容は変化しませんよ》

ぶんと眼前に緑色の画面が出現する。そこに表示されていく白い文字列。ルナはそれを目で追っていった。

『名前：ルナ。種族：兎人族。職業：魔王。ステータスレベル拾参。装備：純白の胸部さらし、高価なバスタープ。保有ノーマルスキル：穴掘り名人、発情期、寂しがり屋、抜け毛。保有エクストラスキル：なし。保有ユニークスキル：脱兎、死神王の太鼓判』

ステータスレベルが上昇しているのは、間接的にはあれ、前魔王を倒したからであろう。無言のまま、人差し指で画面をタッチした。すると、ぱつと表示が切り替わり、ステータスの詳細が広がった。深い深いため息を吐く。

「これって、決して強い部類には入らないですよね」

《はい。ルナ様の仰る通り、強くはありません。控えめに言っても、『雑魚』です。野生のスライムの方が強いかと》

「うう・・・」

ナビゲーターの冷徹な言霊がルナの心を抉る。言い返せないのは、凶星だからだろう。

『HP：二十三。MP：四十六。物理攻撃力：一。物理防御力：三。魔法攻撃力：一。魔法防御力：二。素早さ：百二十三。回避力：三百八十二。運：十八』

まさに、逃げるためだけに割り振られたと言っても過言ではない能力値だった。

《ちなみに、これは平常時でのステータスになります。ユニークスキル『脱兎』発動時には、素早さ及び回避力に五倍の補正がかかります。また、ユニークスキル『死神王の太鼓判』発動時には、状況に応じて、運に二倍から五十倍の補正がかかります》

ユニークスキル『脱兎』は、攻撃回避時のみ素早さと回避力に固定値の補正がかかるというものであり、『死神王の太鼓判』は、危険を感じた際に限り運に流動値の補正が付与されるといふ補助スキルだ。

「逃げ足の速さだけが取り柄の魔王って、どうなんですかね・・・」

《前代未聞でしょうね。吉と出るか凶と出るかは、貴方次第です。私は、後者の確率が非常に高いと思慮しますが》

「ナビゲーターさんは、少しも優しい言葉をかけてくれませんかね」

《そうでしょうか？ 十分に慈しみの心を持って接しているつもりですよ》

「私にとつては、鞭と鞭と鞭と鞭にしか感じられません！ あと、鞭です！」
頬を膨らませ、ぷいっとそっぽを向く。

《存在しない慣用語を創造しないでください。あと、『あと』の使用方法が誤っています》
「わざとです！」

《はあ。そうですか。何か意図があつてのことなのでしょうね》

「はい。伝わつてないみたいですけど……」

《いいえ。きちんと承りました。今後は善処させていただきます》

「ナビゲーターさん……」

《……まだ鞭が足りないとのことですので》

「もう!!」

がぼつと上半身を勢いよく起こす。同時に、画面がぶうんつとノイズを起こし消失した。

「あ、そういえば。ナビゲーターさん？」

何かを思い出したかのように、ぼんつと手を叩くルナ。

《何でしょうか?》

「ナビゲーターさんって、長いので、ナビさんって呼んでも良いですか?」

《……はあ。構いませんが》

「わーい。ありがとうございます。ナビさん」

ルナは両手を挙げて喜びを表現した。

《本当に、貴方みたいな方が魔王になるとは……》

ナビゲーター改め、ナビはさすがに呆れているようであったが、どこか嬉しそうでもあった。

そこで、扉をノックする音が響いた。

「私です。入室の許可を」

低く落ち着いた声色。どうやらガゼルのようだ。ルナは、「どうぞー」と、気の抜けた声で招いた。がちやりと、ベッドの傍の扉が開き、タキシードの魔人が一礼をして入ってくる。そのまま洗練された所作で扉を閉めると、「ジャミング」と、短く唱えた。

ルナは、その動作にびくりと反応する。

「その、今のは？」

ガゼルは、きよとんとしたような表情を浮かべた。

「防音魔法だが？」

「えっと、どうして？」

「どうしてって。他の奴に聞かれたらまずいだろう？」

「まずいって、一体何を？ それに、その喋り方は？ まさか、また私に乱暴する気

じゃ……」

さあつとルナの顔が青ざめる。両手をクロスして、自らの体を隠すようにして縮まった。

その様子を見て、ガゼルは合点がいったようであった。右手で額を抑え、首を横に振ると、かつかつとルナの元へ歩み寄る。

「ひいっ」と、引きつった悲鳴をあげるが、構わずベッドの手前まで移動した。そして、右手の人差し指をすーっと円を描くように動かす。と同時に、数メートル先に置かれた木製の椅子が、ガゼルの背後までスライドした。それに、無言で腰を下ろし、貞操の危機を感じてぶるぶると震えるルナを見る。

「お前が、魔王の器ではないことは、承知しているぞ？」
「へ？」

思いもかけない一言に、間拔けな音が喉から漏れた。ガゼルは真剣な表情で続ける。
「それに、俺はお前のような餓鬼の体に、全くもって、微塵も、毛ほどの興味もない」

「貧弱だな。HPが二十三。攻撃と防御に至っては一桁か……素早さと回避力だけがずば抜けて高いが、何か特殊なスキルでも所持しているのか？ この数値では、あの異

常な回避能力の説明がつかん」

ガゼルが、じろしろと舐め回すように観察しながら呟く。ルナは、少しでも距離を取ろうとベッドの端っこまで後退していた。

「どうして、それを？」

震える声で尋ねる。

「俺は『知力』を冠する上位魔人だ。この瞳は、対象のステータスを観測することができ
る」

そう告げて、こんこんと、右手の人差し指で自らのこめかみを突いてみせた。

「そんなあ」

魔王として、今後どうやって日々の業務をやり過ごそうかと考えていた矢先の出来事に、ルナは落胆した。魔王業二日目にして、早くも解雇の予感が漂う。職を失うこと、居場所を無くすことに恐怖する彼女の脳内に、前世で経験したケーキ屋でのアルバイトの記憶が蘇る。

（あの時は何をやらかしたんだっけ？ 確か、手を滑らせて常連さんの頭にケーキを落としてしまったり、躓いた拍子にショーケースへ突撃して破壊してしまったり、レジで返した千円札のおつりの中に誤って一万円札を混入させてしまったり・・・記録は、三日だったかな。店長から、「このままだと店が潰れてしまう。頼むから退職してくれ」つ

て懇願されたんだよね。今回は二日か。または記録更新だよ……」

自分の不甲斐なさに、しゅんと耳が垂れ下がった。

ちらつとガゼルの顔色を伺う。何かを言いたそうな表情だ。きつと、解雇通告だろう。もしかしたら、『一身上の都合』で辞表を強制してくるかもしれない。退職したら、たった一人でこの世界をどうやって生きていこう……。ルナは、視界が真っ暗になるように感じた。

だが、彼の対応は良い意味で予想を裏切るものだった。

「何を勘違いしているのか知らないが、このことは他の奴には秘密にするつもりだ。だから、防音魔法を使用したのだぞ？」

ぴんつとルナの耳が立ち上がった。

「え？ どういうこと、ですか？」

「どうもこうもない。お前には、このまま魔王を続けてもらう。何の為に、昨日必死で英雄になるのを阻止したと思っているのだ」

「それってつまり、私をまだ必要としてくれているという、そういう事でしょうか？」

おずおずといった感じだ。ぴくぴくと耳が痙攣しているのは、次に来るのであろう言葉を期待しての反応だと思われた。ガゼルは、特に表情を変えることもなく頷いた。

「……まあ、そういうことだな」

ルナの瞳に光が宿る。

「こんな、私でも?」

「ああ。そうだな」

「店長!! 私、頑張ります!!」

その言葉を聞くや否や、自慢の脚でガゼルの眼前まで跳躍し、腕組をしている彼の腕を無理矢理に引き抜いて、両手でしっかりと握りしめた。きらきらと目を輝かせる。そこには、痛い程のやる気が漲っていた。先程までの警戒心は一体どこへ行ってしまったのだろうか。バカンスで海外にでも旅立ってしまったのか。

予想外のリストラ回避に興奮しきっているようではあるが、彼が止めなければ今頃『英雄』になれていたという事実は、その狭すぎる思考からは除外されているようであった。

「俺は、店長ではない。むしろ、お前の方が俺の雇用主だろうか? 本当に、お前と接していると調子が狂う」

ぶんぶんと右腕を振り回され、無垢な笑顔を容赦なく浴びせられる。明らかに困惑しているようであった。

「して、私は一体何をすればいいのでしょうか?」

びたりと両手の動きを止めるルナ。

「そのことなのだが」

ガゼルは、好機とばかりに覆いかぶさるふかふかの両手を払いのけ、解放された腕を所定の位置に戻した。その拍子に一本の白い毛が抜けて宙を漂う。それは、互いの視界をゆっくりと横切っていった。十分な溜を作った後、ガゼルが口を開く。

「お前、転生者だろう?」

「ふえ? どうしてそれを?」

ルナは、ぱちくりと瞼を瞬かせる。

「やはりそうか」

「もしかして、貴方も?」

「まさか。転生者は稀な存在だ。そんな、ほいほいといえるものではないさ。昔、世話になった奴が詳しくてな」

「そうなんですか? ああ、可能であれば教えて欲しいです。恥ずかしながら、自分が何を分かっていないのかでさえ、分かっている状況です」

「もちろんそのつもりだが? お前には、魔王として俺達を導いてもらわなければならぬのだからな」

「ガゼルさん? もっと、怖い人だと思っていました。意外に優しいんですね」

そう言っただけの尊敬の眼差しを向ける。しかし、当のガゼルはそれほど嬉しそうではな

かった。

「つい昨日は、変態と罵っていたというのにな。あと、他の連中がいる時には『さん』付けで呼ぶのは止めておけ。魔王としての威厳に関わる」

「はい、すみませえん」

「はあ。先が思いやられるな・・・そうだな。まずは我々のいる魔界についてなのだが、各世界へのポータルとなっている。魔界を通じてのみ、各世界間を行き来することが可能だ」

「はい。先生。すみません。いきなり意味が分かりません」

「・・・魔人の話は最後まで聞きなさい。ひまわりの花を想像してみろ。真ん中の丸い部分を魔界だとすると、外側の花びらが各世界だ。全ては魔界を中心として繋がっているのだ。そして、各世界にはそれぞれ勇者が存在している。もちろん、勇者毎にその強さは異なる。昨日お前が見たのは、ちょうど中間位の部類だな。中には、前魔王でさえ手も足も出ないような化物も存在する。特に、お前のような転生者が勇者となっている場合はかなり危険だ。転生者は、総じて強力な力を持っているからな。お前は、もしかしたら例外なのかもしれないが・・・ちなみに、複数の世界が存在するという真実を知っているのは魔界の住人だけだ。だから、太刀打ちできないことが明白な世界には今まで少しもちよっかいを出してこなかった。触らぬ神になんたらと言うやつだな。下

手に手を出さない限りは、向こうもこちらの存在に気付かないようだから、あえて火中に飛び込むこともないだろう」

「ちよつと待つてください。ということとは、私の居た世界にも行けるってことですか!？」先ほど注意を受けたばかりだというのに、途中で割り込んでいく。魔界と様々な世界が繋がっている。

それは、ルナにとって一滴の希望に感じられたからだ。元の生活に戻ることは不可能でも、母や友人の元気な姿を見に行く。それだけでも十分であった。

ガゼルは、話を遮られて事に対して眉を顰めはするが、何回も文句を言うつもりはないらしい。

「それは無理だ。転生者の元居た世界には、そもそも勇者や魔王という概念が存在しない。つまりは、全く別次元の世界だ。残念だが、魔界と繋がることは絶対がない」

その代わりに、ルナの希望を秒で砕いた。

「そうですね。そんなに上手い話なんてないですよね。とほほ」

不可能は承知でのことだったようだが、あからさまに肩を落とす。ガゼルは、構わずに続けた。

「そして、ここからが本題だ。各世界には、『生命の容量』というものが存在するのと同じに、その調整機能が備わっている。転生者もその機能の一つとされているが、他には

天災や疫病、強力な魔物の出現等が挙げられる。これらは、生命が多くなり過ぎた際等に、バランスを取る為に働く機能で、基本的にはこれに任せておけば問題は生じないのだが、たった一つだけ、これが想定していない生命増加の原因があつてな。それが、魔界を通じての生命の世界間移動だ。一人や二人なら、気に掛けるほどの事ではないのだが、これが数千、数万単位でのものになるとどうなるか？ 単純な話だ。大きくなり過ぎた花卉はその重量に負けて剥がれ落ちる。容量を超えた世界は自然に消滅してしまうのだ。問題はそれだけではない。滅んだ世界を起点にして『歪み』が広がり、隣接する世界、そして我々が魔界でさえも消滅する可能性だつて考えられる。道連れを食らうかもしれないのだ。ここまで話したら、もうお前の果たすべき使命は理解できるだろう？ 歴代最強と謳われた前魔王のいない今、お前は俺の影成る指導のもと、立派な魔王として、軍隊を率い、魔界の秘密を守り抜くことで、世界の均衡を保つのだ！」

そしてガゼルが、芝居がかった仕草でぱつと両手を広げる。呆けた表情で話を聞くルナの額を、ぶわつと力強い風が撫でた。前髪が揺れる。

「私が、世界を……」

「そうだ……そもそもこの魔界に転生者が現れること自体が未曾有の出来事だ。しかも、それが魔王になるなど、何の奇跡だろうか。もはや、運命としか考えられない」

そこで、静かに目を瞑り、天を仰ぐ。しばらくそのままの格好で何かを思考し、うん

うんと頷くと、勢いよく目を見開きルナをまつすぐと見つめた。

「お前は、魔界が生んだ唯一無二の転生者だ。宿命により、なるべくして魔王となった。この偉大なる魔界に選定された魔王なのだ！」

そこまで興奮気味にまくし立ててから、広げた腕をゆつくりとたたむと、少し恥ずかしそうにタキシードの襟を正した。わざと視線を外し、ぼそりと呟く。

「二度と口にするにはないと思うが、正直、転生者であるお前にはかなり期待をしている。例えまぐれであつたとしても、前魔王を倒した張本人だ。きつと、見た目からは計り知れない程の力を秘めているのだろう」

褒めることに慣れていないのか、ばつが悪そうに顔を赤くして、折れた角の先端をいじる。ルナは、一人で勝手に盛り上がる彼を見て、引きつった笑みを浮かべた。

（うわあ。何か、盛大に勘違いをされている気がします。ここに転生したのだって、たまのことで、もとはといえばナビさんの不注意によるものですし、秘めたる力と言われても、確か攻撃系のスキルや魔法はもう覚えられないらしいので、期待にそえるかどうか……）

じんわりと変な汗が噴き出す。居心地の悪さにもじもじと体を揺すった。

（まあ、言えないですけどね）

「ま、任せてくださいやい」と、どきまぎしながら決意表明をした。大事な場面で囁んでし

まったことについては、自分でも気づいたのだが、言い直すような心の余裕は持ち合わせていなかった。

(いつボロが出るか分からないので、魔王業を務めながら、別の仕事もこつそり探そう……)

意外にも堅実的な将来設計を考慮したルナは、ガゼルに聞こえないように小さくため息を吐き、腹を括った。少なくとも今は、ドジで役立たずの自分が必要とされているのだ。できる限りのことはやろう。一生懸命頑張つて、魔界の皆の為になるように努めよう——と。

ガゼルは、とても上機嫌のようであった。にこりと満面の笑顔である。うん、似合わない。ルナはそう感じた。

「まあ、現在我らが魔王軍に切迫した脅威は確認されていない。当面の間は、お前の好きなようにすると良い。と、その前に、私以外の四天王とも一度会っておいた方が良いでしょうな」

「四天王？」

「ああ。魔王直轄の精鋭だ。勇者との戦いの際に一人欠けてしまったが、俺の他に『権力』のグリムと、『腕力』のゴルダンがいる。昨日、グリムは自室にこもっていたし、ゴルダンは武者修行に出かけていたから、まだ面識がないはずだ」

(ええー・・・勇者さんが攻めてきていたのに、自由過ぎないですか？ ド○クエだつたら、一大イベントですよ。四天王総出でお出迎えしないと)

「すぐに召使いに衣服を準備させよう。お前の身仕度が整い次第、奴らの元へ案内してやる」

そう言つて、ガゼルは立ち上がり、扉の方へと歩いていった。ルナは一抹の不安を覚えながら、その背中を見送るのであった。

04 権力のグリム 最強ロリババ登場です。

「ふわあ。随分と立派に見えるものですねえ」

ルナは鏡に映る自身の姿に、感嘆の声を漏らした。

黄金色で壮観な胸当てと腰当て。金属製ではあるが、可能な限り軽量化されたそれは、俊敏なルナの動きを阻害する心配は無さそうだ。腹部等に無駄な鎧を装着していないのは、動きやすさを重視したためだという。その上から、深い漆黒のマントを羽織る。足首に届くほどの長さで、両の肩口にはおぞましく、さも魔王らしいドラゴンの頭蓋骨を模した装飾が施されていた。首から下げたネックレスの先端には、漆を塗ったように輝く濃紫色の飾りが装着されている。球体状のそれは、何かの魔道具なのだろうか。イヤリングにも同様な球がみられた。

ルナの言葉通り、現在の見た目は只者でない雰囲気を放っていた。ただ、魔王かといわれると、あまりにも小柄で可愛らしい……

「何をおっしゃっているのですか。初めから御立派でございますよ」

背後に回り、寝起きでぼさぼさであったルナの髪を櫛で丁寧にとかしながら、召使の女性が言った。穏やかな笑顔が特徴的な美人で、頭部から生えた三角形の耳とメイド服

のスカートを力強く持ち上げるふさふさの尻尾が彼女の種族を物語っていた。

「ありがとうございます。メアリーさん」

「『さん』だなんて、おやめください。魔王様らしく、メアリーとお呼びください」

魔王直属の召使として働く、狐人族の女性。名をメアリーといった。

幼少期は裕福な貴族の家庭で育ったのだが、血で血を洗う親族との後継ぎ争いに敗れ、『九尾の大妖怪』になれなかつた悲しい過去を持つらしい。家から追い出され、死にかけていたところを魔王軍に拾われたのだと、身支度を手伝いながら自己紹介をしていた。八本に分かれた尻尾は、それぞれが意志を持っているかのようにゆらゆらと揺れていた。

「はい、では、遠慮なく。メアリーさつ、おつと、メアリー。実はね、成り行きで魔王になつてしまいました。今になつて私ごとときにそんな大役が務まるのかと不安になつてきました……」

他人に髪をすかれるという、なんとも言えない心地よい感覚を堪能しながら、相談を持ち掛ける。それを受けたメアリーは、目を丸くした。

「まあ。御謙遜を。昨日の前魔王様との死闘、とても素晴らしいものでした。目で追うこともできない程の圧倒的な速さと、一瞬の隙も見逃さない集中力。しかも、勇者まで倒してしまわれるとは。あれ程の力を手に入れる為に、どれだけの努力を積み重ねてこ

られたのか、私程度では想像もつきません。それに、少なくとも私は、貴方様が魔王になられて喜んでいるのです。前魔王様はとも大きく、性格も厳格な御方でしたから、御召し物を着る手伝いをさせて頂いたり、髪を結ったり、こうして楽しくおしゃべりをしたりということがありませんでしたので」

そう言つてメアリーは、器用にルナの髪をくるくると編み込みながら、鏡越しにこりと笑つた。ルナも若干恥ずかしそうに笑い返す。穏やかな空気が流れていた。

「それにしても、あの体格差をひっくり返してしまわれるとはさすがに驚きました。やはり、齡六つにして、エンシエントダークドラゴンを一人で討伐されたというのは、本当なのです」

「へ？」

エンシエ？ ドラゴン？

聞き慣れない単語と、謎の逸話。嫌な予感がして、ルナの笑顔が引きつる。

「あ！ 申し訳ありません。これから忠誠を尽くす御方のことが気になりまして、ガゼル様から、ルナ様の過去を教えていただいたのです。御気分を害されましたか？」

「え？ いや、そういう訳では」

「なら、良かったです。涙無くしては語れない壮絶な人生……とても苦勞をされてきたのです」

眉毛を八の字にして、少し涙ぐむメアリー。一体、ガゼルにどんな嘘を吹き込まれたというのか？

ルナは、気になって尋ねてみた。

「あのおう。ガゼルさつ、えつと、ガゼルは何と？」

「はい。生まれたばかりの頃に、同種族からその非凡なる才能を疎まれ迫害を受けてこられたと。齡二つにして、群れから追放され、この過酷な魔界をずつと一人で生き抜いてこられたのですよね。力無き種族でありながら、生きる為に両親を殺しその血肉を喰らい、外道に手を染め、立ちはだかる者は全て跡形もなく葬る・・・その内に、気付くと獣人を超え、最強の魔人になっていたと聞きました。ガゼル様も、かつて危ないところを救っていただいた恩があると、感謝しておられましたよ」

（・・・話、盛り過ぎでしょ!! 私、いつの間にか両親食べちゃってるし! 外道って何!? もっと具体的に教えてくださいよ! というか、こういう設定でいくなら、まず私に伝えておいてください。うっかり変なことしやべっちゃったら大変ですよ）

「おや、少し暑いですか? 部屋の温度を下げましょうか?」

「だからだと冷や汗を流すルナを気遣うメアリー。」

「いいえ。全然。むしろ、適温です」

ルナは、慌てて平静を装った。

「そうですか。まあ、とにかく自信を御持ちください。貴方は、生まれながらにして最強であった歴代の魔王様方とは異なる背景を持つておられます。弱小種族に生まれながらも、自らの努力で最強になられた唯一無二の魔王なのです。弱きを知り、同時に強きも知る、稀有な存在。もつと誇るべきです。王座に君臨する者として、貴方ほどの適任者はいないと思います。心配せずとも、すぐに皆が慕うでしょう」

「……ありがとうございます。少し、自信が湧いてきた気がします」

誤って転生させられたこと、自らの生い立ち、そしていつの間にか創りだされていた数々の武勇伝。自身を形成するあらゆる情報が、嘘で塗り固められていくことに不安を覚えながらも、既に取り返しのつかない所まで来てしまっていることを実感した。

（今更、全部嘘でした。なんて、口が裂けても言えないですよね……とにかく、メアリーの言う通り、自分を信じてやってみましょうか）

ガゼルと、メアリー、そしてまだ見ぬ数多の部下達による、胸焼けをするほどの期待を背に、『頑張るぞ！』と意気込んだ。駄目だったら、その時に考えればよい。とりあえず今は、目の前のことから順番に乗り越えていくのだ。

ルナは、心の中で力強く頷き、ガッツポーズをする。と、不思議と力が漲ってきた。今なら何でも出来そうな気がする。そうルナは思った。

「そーういえば、メアリー？」

「はい。何でしょう?」

「メアリーのレベルってどれくらいなんですか? 参考までに教えてもらえませんか?」

「はい、構いませんが……笑わないでくださいね。実は、まだステータスレベルは三百十六でございます」

(前言撤回です! やっぱり私に魔王は無理でした)

世界最速の前言撤回記録を打ち出した。単純計算で、二十四倍。あと、どれだけの年月を過ごせば一介の召使に追いつくことができるのだろうか。メアリーは恥ずかしそうに頬を赤らめている。ルナにとっては途方もない数字だが、彼女にとってはそうでもないらしい。

膝から崩れ落ちそうになるのを踏ん張り、「へえー。そうですね。悪くはないですねあ」と、震える声で芝居を打った。

そうこうしている間に、身支度が整ったようで、メアリーがルナの肩をぼんぼんと叩いた。

「はい。完成しましたよ」

「わあ。凄いですね。ありがとうございます」

「いいえ。御手間をとらせました」

綺麗に編み込まれたまるで一つの芸術品のようなハーファアップに、ルナは満足しているようであった。顔を左右に捻り、ちらちらと横目でチェックしながら、「おお」とか「へえ」とか、感激の声をあげる。

ちようどその時、こんこんと扉をノックする音が聞こえた。

「ガゼルです。入室の許可を」

「どうぞー」

扉が開き、ガゼルが一礼をして入ってくる。

「おお！ 御立派でございます」

大げさに両手を広げる。ルナは、少しだけ顔を赤らめてぼりぼりと頭をかいた。

「お待たせいたしました」

「うむ。良い仕事ぶりだなメアリー。御苦労であった」

「もったいない御言葉です」

「それでは、ルナ様。早速他の四天王の元へ向かいましょう」

「は、はい。と、その前に」

「いかがいたしましたか？」

「ガゼルのレベルっていくつなんですか？」

「私は五百四十三です」

撃沈することは分かりきったうえで、それでも気になったため尋ねてみたが、案の定撃沈した。

がつくりと肩を落とすルナ。

その姿を見て、何かを察したガゼルは、「因みにグリムは四百八十九、ゴルダンには六百三十二です。ルナ様の足元にも及ばぬ不甲斐ない我等ですが、どうかお許しください」と、追い打ちをかける。その口元は、意地悪気にひん曲がっていた。

「さあ、行きましようか」

無言でしょんぼりとするルナに、言葉をかけてから、さつと踵を返す。

ルナは、「はい・・・」と、短く答えその後ろに続いた。メアリーからしたら、自分の部下のステータスが予想以上に低いことに気を落としているように見えるのだろうな思い、ちらつと背後を振り返ると、想定通りそこには申し訳なさそうな表情を浮かべる彼女の姿があった。

（ごめんなさい。逆です）

都合の良い勘違いが頻発する現状に心を痛める。誰にも聞こえないようにため息を吐いた。

「ルナ様」

部屋を出る間際、メアリーが呼び止めた。ルナは「何でしょう？」と、振り返る。

「風格とは、その衣装のように着飾るものではございません。貴方の優しさのように自然と纏うものです。どうか、自信を御持ちください」

優しく微笑み、頭を下げる。ルナも、軽く会釈を返し、先を行くガゼルを追って部屋を後にした。

禍々しい蝙蝠の模様が一面に描かれた扉の前に辿り着いたルナ達。上部の案内板には『権力の間』と、記されていた。この先に、四天王の一人がいるのか、と、緊張が高まる。大きく深呼吸をした。

すると、隣に立つガゼルが、扉に視線を残したまま彼女に小声で話しかけた。

「そんなに気を張るな。お前の方が上の立場なのだ。何も臆することはない」

「はあ。そう言われましても……」

「あと、お前のステータスについてなのだが、グリムにだけは伝えておこうと思う」

「え？ それ、大丈夫なんですか？」

「ああ。奴は頭が切れる。いざという時には、力になるだろう」

「……まあ、ガゼルが言うなら、問題ないんでしょうね」

そして、ガゼルがドアノブに手をかけた。

「ああ、それと、奴は何百年もの歳月を生きている。子供扱いだけはするなよ」

「えっと。それは、どういう意味ですか？」

「見ればわかる」

ぎいっと、開け放たれる扉。どんよりとした空気が全身を包んだ。

「これは・・・研究室？」

まず、視界に入ったのは、見たことのない不気味な装置の山であった。ごぼごぼやらがちんがちんやら、ぷしゅーやら、それぞれが思い思いに音を奏でている。装置の中には、赤や紫、青に緑と、色とりどりの液体が満たされていた。臭くも無く、かと言って良い香りでもない独特の匂いが鼻孔を抜ける。

「下手に触れるなよ。中には、危険な薬品も含まれているからな」

「は、はい」

ガゼルは、部屋の真ん中まで進んで立ち止まり、最奥の壁に立掛けられた漆黒の棺に視線を合わせた。なぜこんな位置に設置されているのかと思いつながら、ルナも同じようにそれを見つめる。耳と澄ますと、微かにそこから寝息が聞こえた。

「おい。起きてくれ。お前に重要な話があるんだ」

しばらくの沈黙。返事はない。ガゼルは、大儀そうに息を漏らすと、再び口を開こうとする。ちょうどその時、がたがたと棺が振動した。そして、間髪入れずに幼い少女を

連想させる甲高い声が流れ出してきた。

「何じゃ？　今、魔法研究が行き詰まってイライラしておるのじゃが……」

「邪魔をしてすまないな。お前にどうしても話しておきたいことがあるのだ」

「それは、わしの安眠よりも大切なことなのか？」

「ああ」

「……仕方がないのう」

がたんつきいーつと、棺の蓋が開く。もくもくと灰色の煙が漏れ出し、棺の周りを覆った。ごくりと、ルナが生睡を飲み込む。

現れたのは、黒と赤のカラーリングのドレスに身を包んだ少女、いや、幼女だった。身長は、百二十センチメートル弱位か。ルナよりもずっと小さい。腰まで伸びた艶々の金髪と、真っ白な肌がドレスに映える。唇の端からちらりと覗く八重歯は、幼さをより誇張していた。機嫌は、言うまでもなくよろしくないよう、きりりと吊り上がった眉毛と、真一文字に結ばれた口元がそれを示していた。

ガゼル曰く、この容姿をして、何百年も生きているとのことだが、にわかには信じがたかった。

「で、何のようじゃ？」

グリムは、腰に手を当てて、ガゼルをじろりと睨む。

「昨日のことなのだが、魔王様が敗れた。正式なる決闘においてな。つまるところ、新たな魔王が誕生したというわけだ。それが、この御方。名をルナ様と言われる」

それを聞いたグリムは、一瞬目をぱちくりとさせたが、たちまちに眉根を寄せた。視線をルナの方に移し、じろしろと眺める。明らかに不審がつているようだ。

「ふむ。確かに、奴の魔力を感じできないところを見ると、敗北したというのはあながち間違いではないようじゃの。じゃが、本当にこやつが魔王を？ 奴を凌駕する程の実力があるようには、到底思えぬのじゃが・・・」

耳の先からつま先までを何往復もするグリムの視線。恥ずかしさと緊張から、ルナは一直線に背筋を伸ばしたまま固まっていた。

「本当に、お主が倒したのか？」

「は、はい・・・一応」

確かに、ルナが倒した。半分事故のようなものではあるが、嘘は吐いてはいない。

「ふーむ・・・」

顎に手を添えて、上目遣いでルナの顔を覗く。ルナは落ち着かないように、目線をきよろきよろと動かしていた。

「何を拳動不審にしておる？ わしの目をしっかりと見よ」

「は、は、は」

そんな様子を見兼ねたガゼルは、決心したように目を閉じ頷くと、ゆつくりと口を開いた。

「で、ここからが本題なのだが。実は、ルナはレベルがつ」

「魅了（チャーム）」

ガゼルの発言が終わるのを待たずして、紡がれる詠唱。

「そうそう、チャームって、えっ!? おまつ! 何のつもりだ!？」

「この方法が、一番手っ取り早いじゃろう? 少なくとも、わしよりも強ければ、この魔法は通用せぬからな」

「だから、それについて今から話そうと」

右手で額を覆い、狼狽するガゼル。

「おい。大丈夫か?」と、声をかける。

が、ルナは「はれ? はれはれ?」と同じ言葉を繰り返し、魂が抜けた人形のように立ち尽くしていた。視点も定まっておらず、心ここにあらずで、大丈夫ではなさそうだ。「何か裏がありそうだと感じたが、やはりな。話してもらおうぞ。その兎。わしが命ずる。全てを包み隠さず話すのじゃ」

むふふと、してやったりの表情を浮かべながら、ルナを指さす。

ガゼルは、「そんなことせずとも俺が話すのに……話を最後まで聞かない奴ばかり

だな」とぼやいた。

ゆらゆらと頭を揺らすルナの耳に、グリムの命令が侵入する。

『魅了(チャーム)』は、グリムが『権力』を冠する最大の所以である精神干渉魔法で、その効果は自分よりもレベルの低い対象と視線を交わすことで、言いなりにすることができるといふものだ。まだ、三桁にさえ到達していない弱小ステータスのルナが、その呪縛から逃れることはまず不可能であった。

ガゼルも、ここまで来ると完全に諦めたようで、成り行きを見守る姿勢だ。

だが、誰も予想だにしない出来事が起こった。

《警告。チャームによる精神侵食を確認しました。対抗手段として、ノーマルスキル『発情期』を強制発動し、精神を錯乱状態にします》

無機質なナビの声がルナの脳内に響いた。瞬間的にルナの思考がクリアに戻る。

「え？ ナビさん？ 何を言っ?! おひゅん!!」

しかし、すぐに再び混濁した。だらりと脱力し、電池が切れたようにこうべを垂らす。チャームに掛かったにしては、あまりに不自然な反応をするルナを見て、ガゼルが心配し「おひゅ？ おい、大丈夫か？」と声をかけるが、反応はない。

グリムも、訝し気に目を細めた。

「ふむ？ おかしいのう。きまりが浅かったか？」と、閉店後に電源が落とされたヒュー

マノイドロボット、ペツ〇ー君のように棒立ちとなるルナに近付く。真下から彼女の顔を見上げ、再度精神侵食を試みようとした。

が、その刹那。グリムの細い腰にルナの右腕が回された。

「なっ！ なんじゃ!?!」

突然のアクシデントに、驚愕する。と、同時に添えられた腕に力がこもり、ぐいっと引き寄せられた。ふわりとグリムの足が地面から離れる。二人の体がぴたりと密着し、拳一つ分くらい近い距離で顔と顔が対面した。

「貴様！ まさか、謀ったな！」

「……」

二人の目が合う。対照的な瞳。畏にはまったと思いきみ、次に来るであろう敵の攻撃に怯える弱弱い瞳と、いつもの呆けたものとは明らかに違う強烈な意志の籠った力強い瞳。にいつとルナの口元が吊り上がった。その表情の変化に、グリムは「ひいつ」と、小さく悲鳴をあげる。

(や、殺られる!!)

自分の傲慢さと不用心さを今になって後悔する。魔人は見かけによらないというが、こんなひよろひよろの兎に負ける日が来るとは。これほどの至近距離だ。本当に前魔王を倒した猛者だというならば、魔法の詠唱をする暇など与えてはくれないだろう。完

全に『詰み』だ。——と、敗北及びそれに伴う死を覚悟した。

覚悟した、はずだったのだが。

「やあ。僕は稀代の大魔王ルナ様だよ。高貴で美しい御嬢さん。僕の妃となってくれ」

「はっ?」

同時にあんぐりと口を開けるグリムとガゼル。その目は揃って点と化していた。

ルナはふふつと不敵に笑い、空いた左手でルナモッチーのヘアピンで留められていない方の前髪を掻き分ける。そして、そのまま唾然とするグリムのシャープな顎に優しく添えた。

「無言の了承、と、いうことかな?」

妙にイラつとする自信に満ち溢れた言動。まるで、別人のようではあるが、残念なことに、幾分かこちらの方が『魔王』らしくはあった。

「貴様! 何のつもりかは知らぬが、わしを愚弄するつもつ、うぶっ!」

込み上げる怒りを抑えきれずに、激昂するグリム。だが、それは途中で遮られてしまった。

グリムの血色の良い真つ赤な唇に、ルナの唇が無理矢理に押し付けられたのだ。ガゼルは、「おっと・・・」と、見てはいけないものを見てしまったかのように、咄嗟に右腕で目を覆い、顔を背ける。さすがは、腐ってもジェントルマンだ。その一連の動作に

は一切の無駄がなかった。

「……っ!?!」

グリムは数秒の間、自らの身に何が起こったのかを理解することが出来ずに、かちんこちんに固まる。しかし、すぐにかつと目を見開き、じたばたと暴れだした。

「んんんーっ!?!」

たつぷりと怒気を含んだ唸り声をあげようとするが、口が塞がれているため、上手く紡ぐことが叶わない。ごすごすと宙に浮いた足でルナを蹴り、おまけにぼこすかと拳も浴びせるが、見かけ通り非力な彼女の打撃ではダメージになることは無さそうだった。くうつと自らの貧弱さを噛みしめ、今度は力づくで、剥がしにかかる。足の裏でルナの腹部を思いつきり押し、両手でルナの髪を鷲掴みにして、自分とは反対側に引っ張った。顔面の皮が頭部へ引き寄せられ、糸目になるルナ。

「ふはあ。はあはあ……」

さすがに両者の唇が離れ、グリムは荒い呼吸をしながら、眼前の変態を睨みつけた。その顔は酸素不足の為か、羞恥心によるものか、真っ赤になっていた。ルナは、つうつと滴り落ちる涎の糸を恍惚の表情で眺めると、再び熱いベーゼをかまそうと顔を寄せ

る。
グリムは、再び「ひい」と、短い悲鳴をあげる。

(や、犯られる!!)

即刻、「アイシクルトルネード!!」と、強力な上級魔法を唱えた。

「グリム! それは駄目だ!」というガゼルの制止は空しく空に消え、瞬間、前方に何本もの巨大な氷柱が現出した。それは部屋中の得体の知れない装置をばきばきと破壊しながら成長し、かつ氷漬けにしていく。そして、部屋の端まで迫り着くと強固な魔王城の壁を易々と貫き、廊下一帯をスケートリンクへと変えてしまった。外からは、メイド達のものであろうけたたましい悲鳴が響く。

たった一言。それだけで、阿鼻叫喚の地獄絵図が完成した。——だが、

「はあ。はあ。どうして、どうして、貴様は、そこにいるのじゃー!!」

不幸にも、博物館の展示品と化したガゼル。その頭上、氷の嵐の被害を退け、できたばかりの冷たい足場に仁王立ちするルナを見上げて、声を震わせる。

「ふふふ。恥ずかしがり屋だね。でも、それくらいじゃや馬なのが、丁度良い」

「ひ、ひいひい。サンダーアロー!」

舐め回すようなルナの視線に、ぶるぶるとする寒気を覚え、雷を帯びた両手をルナの方へ突き出す。すると、目にも留まらぬ速度で、雷撃が発射された。飛んでいる蠅でさえ容易く打ち抜けるような神速の一撃。しかし、それでさえ、ルナを捕らえるには遅すぎるようであった。ルナが居たであろう空間を通過し、背後の壁を粉々に粉碎する。ぱ

らばらと、破片が舞い落ち地面でバウンドした。

「なんでじゃ！ 掠りもせぬというのか！ この、化物め！ サンダーアロー！ サンダーアロー！ サンダーアロー！」

一心不乱に、魔法を乱唱する。雷の銃弾がグリムの視界に入る物全てを砕いていった。高速、いや光速で飛び回る一匹の小さな魔王を除いて……

「あああああああ!! サンダーアロー！ サンダーアロー！」

完全に、我を失い半ベそをかくグリム。数分もの間、手を休めることなく上級魔法を打ち続けた彼女は、さすがに疲労したのか、詠唱をやめると膝からがくりと崩れ落ちた。

「はあ、はあ、はあ……」

全身から汗を流し、肩で息をする。

「やつとで、大人しくなつたね。子猫ちゃん。ふふ」

ルナはぎつぎつと、ゆつたりした足取りで、静かになつたグリムに近付く。そして、すぐ傍まで迫り着くと、腰を落として彼女の肩に手を置いた。

「さあ、行こうか？ 僕等の愛の巣に。ね？」

ばちこんつと、キザすぎる強烈なウインクをかますルナ。だが、グリムはその瞬間を待ち構えていた。にやりと笑い、顔を上げる。

「さすがにこれは、避けきれんじやろう。ビッグバンインパクト!!」

05 腕力のゴルダン 筋肉魔人と邂逅です。

「なあ、ガゼル君」

「気持ち悪い喋り方だな。まだ元に戻らないのか」

ルナ達は、次なる四天王に会うため、『権力の間』を後にしていた。目の前にあるのは、何の変哲もない木製の扉。上部には『腕力の間』と記されている。

「あの子は、いったいどこへ？」

寂しそうな表情を浮かべて、ルナが尋ねた。

「はあ。そんなことを俺に聞くな。まったく、誰のせいで、あんな事態になったと思ってるのだ。嫌でも財政が厳しいというのに、どこかで修繕費を確保しなければ……暫くは徹夜だな」

ぼろぼりに破け、擦り切れ、取り返しがつかない程に汚れてしまったお気に入りの夕キシード。その襟を軽く正そうとするが、指で挟んだ瞬間にびりつと音を立てて本体と乖離した。掌に残った暗黒の布を哀愁に満ちた瞳で見つめ、込み上げてくる涙の感覚を塞ぎ止めようと、目を閉じて鼻根を摘まんのだ。

心身ともに疲労困憊のようであった。しかし、魔王軍で一番の社畜と名高い彼に休ん

でいる暇はない。

「よし、入るぞ。お前はもう下手なことはするな。絶対だ。俺の傍で、じつとしておけ」と、一応釘を刺しておいて、扉に手を伸ばした。

『腕力の間』の内部は、先程とは打って変わって煌々とし、眩しいくらいであった。

床一面には、衝撃緩衝マットのようなものが敷かれており、独特のゴムっぽい弾力が足裏に広がる。その上に所狭しと並べられているのは、懸垂マシンに、ダンベル、エアロバイク、その他、使用方法も名称も分からないような専門的な器具の山。てっぺんからつま先まで筋力トレーニングに使用する装置なのだろうが、その光景は一般的な『異世界』とのイメージからは余りにかけ離れたものであった。

「ここは、トレーニングジムかな」と、ルナが率直な感想を吐く。

「いや、あくまでゴルダンの自室だ。奴は、三度の飯より鍛錬を好む真正正銘の脳筋だからな。当初は生活用に提供したのだが、いつの間にか、こんなことになっていた訳だ」そう言つてガゼルは、部屋の真ん中で黙々とベンチプレスに勤しむ巨体を指さした。

サイドに鬼盛りされたプレート加重の重さはどれ程のものなのか。頑丈そうなバーベル

シャフトが、ほぼ九十度にしなり悲鳴をあげていた。隆々とした筋肉が、汗を弾いて輝く。ルナ達には、まだ気付いていないようで「一万三千六十、一万三千六十一、一万三千六十二」と、脇目もふらず途方もない桁数のカウントをしていた。

「ふふ、なかなか面白そうな魔人だね」

「頼むから、これ以上面倒なことは起こさないでくれ」

「分かっているよ」

にやにやと笑うルナを一瞥し、得も言われぬ不安に苛まれるガゼル。

（本当にこいつは、どこまで正気なのだろうか。こうなってしまったのは、グリムのチャームがきつかけではあるようだが、以前の性格の方が幾分も扱いやすかった……）

「ゴルダン。御取込み中の所すまないが、こっちに來てくれないか」

ルナの気味悪い精神状態が早急に回復することを願いながら、とりあえずは自らの職務に専念する。

「んあ？ ガゼルか？ どうした？」

ゴルダンは、ひよいつとバーベルを脇に下ろして立ちあがると、言われるがままに二人の元へと移動を始めた。

身長は四メートル近くあり、ガゼルよりも遥かに高い。ルナとは、まあ、あえて比べる必要もないだろう。トレーニングウェアのような真っ黒の長ズボンを履き、上半身は

何も着用していない。代わりに纏っているのは、筋肉の鎧だった。『ばきばき』という表現では足りない程に、細部まで創りこまれた一級芸術品。無駄な肉は微塵も存在せず、浮き出た血管は今にも破裂してしまいそうだ。山脈を連想させる屈強な体軀は、それだけで対峙する者に何かしらの衝戟を与え、委縮させてしまおう。重量感のある大きな足を下すたびに、ずしずしとその振動が響く。岩石のように角ばった顔面の額中心から生えるのは、魔人の証、威厳を放つ立派な一本角であった。

「ん？ 獣人族？ 見ない顔だな」

約二メートル手前で立ち止まり、ルナを見下ろす。ルナは、目をきらきらと輝かせながら、立ちほだかる生きた大壁を見上げた。

「立派だ……素晴らしい肉体美だね。惚れ惚れするよ」

ゴルダンが、目を大きく見開いた。わなわなと小刻みに震える。そして、「お前、良い奴だな！ 筋肉の美しさ、分かる。ラットプルダウンするか？ それとも、アームカールするか？」

自慢のボディを賞賛され気を良くしたのか、ゴルダンは顔をほころばせ、次から次へと筋トレマシンの利用を勧め始めた。

だが、「いや、今は遠慮しておくよ」と、丁重にお断りを入れる。

ガゼルは、こほんつと咳払いをしてから、そんなやり取りをする両者の間に割って

入った。

「えー、実はな。今お前の目の前におられるこの御方なのだが、つい昨日、前魔王を正式なる決闘において倒され、新たな魔王の座に就かれた我等の君主である。名をルナ様と言われる。四天王として、忠義を尽くすように」

「魔王、倒した?」

それを聞いたゴルダンの体がびくりと反応する。

「こいつが?」

「ああ。そうだ」

「強いのか?」

「無論だ。ルナ様の实力は前魔王を遥かに凌ぐ」

「そうか……」

何かを言いたそうにじいつとルナを見つめるゴルダン。ガゼルは、彼が次に口にするであろう言葉を予め予測していた。毎日鍛錬に明け暮れ、ことあるごとに修行の旅に出ている、己を磨く。そんな彼が、新魔王に最初に投げかける言葉はこれしか考えられない。

「俺、こいつと戦いたい」

顔を伏せ、にやりとガゼルが笑った。

「急に何を言い出すのだ。不敬だぞ」

さつと笑みを消し、演技がかった動きでゴルダンに詰め寄る。

「こいつ、魔王倒した。俺は、一度も倒せなかった。こいつ、魔王よりも強い。俺、こいつと戦う。そして、こいつを倒す。俺、こいつより強い！俺、魔王よりも強い！！だから、俺と戦え！！」

（なんと、単純明快な思考回路なのだ。こういう奴が一番扱いやすい）

ガゼルはこぼれそうになる笑顔を、何とか押し込め、努めて平静を装う。

今のルナでは、この筋肉魔人に敵わないことは百も承知だ。当然、真正面から堂々と相手にするべきではない。となると、この後は、『新魔王就任式』やその他の行事を理由にたちまちの決闘は断り、先にグリムに真実を告げ協力を得る必要がある。研究資金の増額を取引材料とすれば、すんなり快諾することだろう。そして後日、決闘会場に前もって設置式の魔法トラップを仕掛けておいて、あたかもルナの魔法でゴルダンを倒したかのように見せかければ良い。魔法の知識に乏しいゴルダンの事だ。まずバレルこととはないだろう。観戦者共も、まさかグリムが設けたものだとは思いまない。前魔王に続き四天王一番の武闘派であるゴルダンも倒したとなれば、誰もがルナを新魔王としてふさわしい存在であると認めるはずだ。イカサマではないかと言われれば、反論のしようがないが、転生者としての力に目覚め、真にゴルダンを超える強さを手に入れた際に、改めて決闘をさせれば問題ない。

——と、ここまでが、ガゼルの計画であった。

新生魔王軍の土台を盤石なものとするための、完璧で抜け穴など一つもない、渾身の智謀だ。さあ、『これから新任魔王の業務で多忙を極めるので、日程を調整させてほしい』と提案するだけである。しばらくは、大好きな修行の旅にでも出てくると良い。

「よし、受けてたとうか、ゴルダン君。僕はいつでも良いよ」

「感謝する。二時間後、地下闘技場で待つ」

ふふふと、抑えきれずに声を漏らすガゼル。愚者共め、全ては俺の手の内なのだ!! と、叫びたくなる気持ちを抑え……

「え?」

思わず、二度見、いや三度見と、挙動不審にルナを振り返る。まるで、信じられないものでも見るかのように何度も何度も。衝撃が強すぎて、思考が置いてきぼりを食らう。そして、徐々に状況を把握していった。

(こいつ、やりやがったな。あれだけ何もするなと言いつけておいたというのに)

最大の敵は身内にあり、真に恐れるべきは有能な敵ではなく無能な味方である、なるほど、どれだけ知略を巡らせても上手くいかない訳だ。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ!」と、背中を向けて筋トレを再開するゴルダンに駆け寄るが、既に頭の中は戦いのことで埋め尽くされているのだろう、ばしばしと肩をどつい

ても、眼前で忙しく手を振っても、その声が届くことはなかった。

「勝つ。勝つ。勝つ……」と、トレーニングの手を休めることなく、瞳に危険な色を浮かべながら独り言を連ねている。

『新生魔王軍一夜にして壊滅』

そんな恐ろしい単語が頭をよぎった。

現在、魔王の器に足る人物なぞ存在しない。ルナが死ねば、間違いなく魔王軍は機能しなくなる。それだけは、どうしても避けなければならなかった。息を荒くしながら、頭脳をフル回転させて打開策を捻り出そうとする。そんなガゼルの背中をぼんぼんと優しく叩き、ルナが一言。

「何をそんなに苛立っているんだい？ おっかないなあ。もっと、余裕を持っていこうよ」

「くそがあー……!!」

我慢できずに、喉の奥から溜まりに溜まった怒りの言霊を吐き出し、呪い殺すように鋭く邪悪な視線で諸悪の根源を睨みつけた。

「わわわわわわ、私は、なななな何てことをしてしまったのでしょうか」

自室に戻り、我に返ったルナは、事の顛末をガゼルから聞き震えあがった。当該期間の記憶は曖昧なのだが、「ルナ様とゴルダン様が決闘されるそうよ」とか、「前魔王様を倒されたルナ様が負ける訳ないわよね」とか、「もしかしたら、ゴルダン様が勝つかもよ」とか、廊下から聞こえるメイド達の楽しそうな話声が、これが現実であるということを手裏付けていた。

《グリム様のチャームによる精神侵食を確認しましたので、対抗手段としてノーマルスキル『発情期』を発動させ、強制的に錯乱状態に致しました。錯乱状態時は、精神が混濁するため、あらゆる精神干渉系魔法の効果を受けませんが、自身の制御が効かなくなります。そのためでしょう》

『発情期』……ありましたね、そういうえば。何てありがた迷惑なスキルなんですか……」

《本来は、性行為を盛り上げるために使用される非戦闘用のスキルなのですが、今回は緊急事態と判断したため、常用外の使用を致しました》

「せ、『性行為』用ですか!?! そんなスキルまで存在するんですね……『性行為』って、つまり、え、エッチって、ことですよね……」

ナビの解説を聞き、自分もいつか本来の目的でこのスキルを使用する時が来るのだからかと、うつすら妄想をして頬を赤く染めた。最後の方は自分で言っていて恥ずかしく

なったのかごによごによと口ごもる。

「お前は、さつきから誰と話しているのだ？」

ガゼルが、心許なげな表情を浮かべていた。彼からしたら、ルナがずっと独り言を呟いているように見えるのだから、心配にもなるのだろう。

「誰って、ナビさんですけど？」

「誰だよ？」

「うーんと、私の『保護者』？ でもないですし、『知り合い』？ だと何か遠すぎる気がしますし、『運命共同体』？ いや、違いますね。そう、私の『友達』です！」

「友達……そ、そうなのか……」

可哀想なものを見るような瞳をするガゼル。聞いてはいけななことだったのかと悟り、肯定も否定もせず、この質問事態を無かったことにする、大人の対応である。

《ルナ様。失礼ですが、ガゼル様は貴方が『痛い子』であると、勘違いされておられるようです》

「痛い？ どこも怪我していませんが？」

《はあ。まあ、良いです。私の声はルナ様にしか聞こえておりませんので、以後ご注意を。あと、ナビゲーターが就いているのも貴方だけです。貴方以外に、私の存在を知っている方はいないと思慮されます》

「え？　そうなんですか？　それは、私が『転生者』だからですか？」

《いいえ、違います。ルナ様を誤って転生させてしまった際に、『生者転生の大罪』に問われ、その責任を取る形で『転生補助業務』の任を辞職しました。そのまま、ニートになる訳にもいかないので、こうしてルナ様のサポート役をしています》

「え？　何かすみません……」

想像もしていなかった真実に、心を痛めた。

《気にしないでください。全ては私の責任です》

「でも……」

《しつこいですね。そんなことよりも、今自分の置かれている状況を打開する方策を考えるのが優先ではないですか？》

ナビに言われて、ルナははっとした。

「そういうえばそうでした。もうあと三十分ほどで、ゴルダンと決闘しなければなりません……私は一体、どうすれば……」

萎萎と耳を垂らして途方に暮れる。魔王としての重圧。きつと、沢山の部下が『新魔王の勝利』を期待しているのだろう。負ければ、その期待を裏切ることになる。

それを見かねたガゼルが、口を開いた。

「まったくお前という奴は……それで、勝算はあるのか？」

ルナは今にも泣きだしそうな顔でガゼルの方を向き、ぶんぶんと首を振った。ガゼルは、「だろうな……」とあきれ果てた様子で肩をすくめる。

「で、でも、約束を破る訳にはいきません。『風格』は、着飾るものではなく纏うもの。ずっとダメダメだった私ですが、魔王として精一杯頑張ると決めたんです。例え負けると分かっているても、誠意を見せなければ……だって、私は魔王だから!!」

「気合が入っているところ申し訳ないのだが、まず、お前の防御力では、ゴルダンの一撃が掠っただけでも即死だろうから、負けるなんてことは絶対に許されぬぞ。敗北は『死』を意味する。さすがに、今お前に死なれたら、魔界は終わりだ」

「うぐつ。私もさすがにまだ死にたくないです……」

再び俯きしよぼんとするルナ。ガゼルは、とびきり大きなため息を吐いて、彼女の座るベッドの端に腰を下ろした。

「まあ、作戦が無い訳ではない」

それを聞いて、ルナが待つてました！　と言わんばかりに、しゅばつと勢いよく顔を上げる。

「本当ですか!?!」

「あくまで、即席のものだ。そんなに期待はするなよ」

「はい。聞かせてください。名参謀ガゼル」

藁にもすがる思いであった。魔の頂点に立つものとは到底思えない低姿勢で、ガゼルの肩を揉み始める。

「やめろ。鬱陶しい。俺は、他人に体を触られるのが大嫌いなのだ。離れろ。しっしっ」「うう……すみません……」

「で、その作戦なのだが。簡潔に言うと、ゴルダンにギブアップをさせる、というものだ」「ギブアップ?」

「ああ。狙うは奴のスタミナ切れだ。無理に勝とうとする必要は無いのだ。お前はただひたすらに奴の猛攻を避けていけば良い。得意だろ? 前魔王の攻撃も全て回避しきったお前なら、不可能ではないはずだ。まあ、勝利した際のインパクトはかなり薄いだろうが、『魔王として、部下には絶対に手を出さない』と心に誓っていることにすれば、多少は盛れるだろう。心優しき魔王が、大切な部下を傷つけることなく倒したという筋書きだな。ゴルダンの自尊心はズタボロになるだろうが、お前の底知れぬ力は誇示できる」

「また、変な設定が増えてしまうような気がします……」

「仕方ないだろ。グリムに観覧席から堂々と魔法を使わせる訳にもいかないし、あいにく俺も遠距離から隠れて支援できるような便利な魔法は持ち合わせていない。逆に聞くが、これ以上の妙案がお前に思いつくのか?」

「うう。それを言われると・・・」

「なら、つべこべ言わずに従え。後、考慮すべきはゴルダンの心がいつ折れるのかという点だろう。奴は、戦うために生きている生粋の戦闘狂だ。下手をしたら、数時間、いや、数日間もの間、ひたすら試合を継続する必要があるかもしれない。途中、見飽きた部下共から野次が飛ぶかもしれないが、お前の忍耐力が試されるな」

「・・・かなりしんどそうですね。先に私の心が折れてしまうかもです」

「もし、そうなったら、お前は死ぬだけだ。そして、新魔王となったゴルダンの脳筋統治で魔界は滅ぶ」

「責任重大過ぎます。まだ、魔王初心者なのに・・・」

と、丁度その時、ぶおーっという角笛に似た音が魔王城内に響いた。

「くそ。もう時間だな。地下へ降りるぞルナ。準備しろ」

そそくさと立ち上がり、廊下へ続く扉へと向かうガゼル。ルナは、着々と迫りくる無情な現実には打ちのめされていた。

「ええー！ もうですか!? まだ、気持ちの整理が・・・うう、天国のパパ。現世のママ。どうか私に力を貸してください・・・まだ、死にたくないですう」

「何をぶつぶつ言っているのだ? ここまで来たら、もうやるしかないだろう。頼んだぞ。お前を信用しているからな」

「はい。そうですね……とりあえず、やってみます」

かくぶるかくぶると、笑い転げる膝を力いっぱいに叩き、何とかベッドから立ち上が
る。そして、弱弱しくガッツポーズを決めた。

「ス、シュマイリユで、い、行きましょう！」